



目 次

法華經の正憶念(其二).....	本多日生
天風三萬里紀行(其六).....	小林日種
記 事.....	
○街頭布教記	○對岸の野口上人
○各地教報	○編輯局より



圖一 就於日三月一十 會議聖修會加來聖德修會國思法知

法華經の正憶念 (其二)

二、本佛の實在 目次

三、釋尊の救濟力

四、題目と釋尊

五、大慈大悲の題目

六、正憶念と福德力
大僧正 本 多 日 生

二、本佛の實在

そこで正憶念の先づ第一に現はれて來ることを考へれば、法華經の勸發品に説かれて居るが如くに、此の法華經を正しい意味に考へるといふことは、お釋迦様がそこに御在なされて、今佛様から面あたり御教を聞いて居るやうな心持になつて、佛の實在を信じて佛の導きを受けて居るといふことが、法華經の正憶念である。故にすべて此處には釋尊に結んで説かれて居る、

「若し是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書寫すること有らん者は、當に知るべ

し、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見たてまつり、佛口より此の經典を聞くが如し、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり、是の人は佛善哉と讃めたまふ、是の人は釋迦牟尼佛の手をもつて其の頭を摩でられ、是の人は釋迦牟尼佛の衣をもつて覆はるゝことをえん。」

斯様な意味にしてそれが正憶念である、即ち「是の人は心意質直にして正憶念あり、福德力あり」

と説かれた、その正しい考へ方と、その正しい所から福德力といふ道徳の精神が現はれて來るところが、法華經の正しき信じ方である。斯様な意味に於

てならば、如何なる宗教學上の議論に對抗して行つても少しも敗を取ることもなければ、心配することはないけれども、唯だ意味も考へずに言葉さへ唱へたら宜いといふやうな議論ならば、宗教學といふものに依つて批判されて行く時分には、一たまりもなくその價値は無いといふ斷定を下されてしまふのである。

斯ういふ意味合を正憶念といふのであるから、能く憶えてさうしてこれを想ひ出す力といふものが大事になつて来るのである。唯だ講釋を聞いたりして居るだけでは駄目ナンである。チョウド子が親を思ふとか、或は妻が夫を想ふとかいふやうな事柄は、一々その講釋を聞かされて「あなたの良人は優しい人ではないか、風采の良い人ではないか、忘れんやうにしないか」あなたの親は斯ういふ親切な人ではないか、能く親孝行をしないか」といふやうな事を言はれて「さうですナ」成る程」と一々受應をして

居るやうな事では駄目である、そんな事は他人から一々言はれる迄もなく、チャント自分で能く考へて確乎り記憶て居なければならぬ事である。それと同じやうに一旦自分の信じ奉る御佛が定まつた以上は、自からその心に渴仰戀慕のはたらきが起つて来ることを第一としなければならぬ。それをボンヤリして居つて確乎と握る所がないものであるから、何通説教を聞いても、どうも有難いやうに思つたり、又氣が抜けてしまつたやうに感じたりするのである。

それで私は始終そう思ふ、東海道を汽車で旅行して見ると沿線に澤山の山を見るけれども、他の山は形もハッキリ意識されないし、名前も覚えて居らぬ、併し富士の山だけは一週観たならばチャント願裡に印象されてしまふ。こんど二度目に見る時には、「あの山は何といふ山であつたか忘れた」と言ふやうな者は無い、「アッ富士が見えた」と言つて驚喜する譯

である。さういふ風に本當に意識したものはタツタ一遍でチャント印象が明確になるのである。法華經の正憶念の第一は、壽量品に示された本佛の尊嚴を意識するのちやといふ事が、今申す東海道の富士の山のやうにビタリと頭腦に入つたならば、モウ二度と「あれは何といふ山ですか」などと聞き返す必要はないのである。それ程に思はないでボンヤリ考へて居るから、一遍見ただけでもあれが富士山であつたか伊吹山であつたか忘れた、「モシ／＼あの山は何といふ山ですか」と聞き返さなければならぬのである。さういふボンヤリした料簡が、宗教の信念に於ては渴仰戀慕の精神を喪ふものである。東海道を旅行して富士の山の名を二度も三度も聞き返すなどといふ者は、富士の山に對する憧憬の精神といふものが涸れて居るから起ることである。

三、釋尊の救濟力

さうして此の釋尊のことを憶念し奉るに就ては、そこに佛の尊嚴と同時に救濟の力といふことを考へて、吾等は釋尊に依つてすべて護られ、救はれるのである、宗教的の要求が全部滿されるのであるといふことを、ハッキリ意識しなければならぬ。その事は壽量品に於て見れば

「我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり」とあつて、諸の苦患といふは如何なる苦みでも、お釋迦様がお救ひ下される譯ナンである。その諸といふことを暫く現在生活の事と未來の生活とに別けるならば、現在に於て世間の樂を興へたまひ、未來に於て涅槃の樂を興へたまふことである、現世安穩後生善處と兩方面に、お釋迦様の御力はすべて我を護り、我を救つて下されるのである、それが諸の苦患を救ふといふことである。それと同じ意味合を法華經の譬諭品に説かれては

「而も今此の處は諸の患難多し」

人生に於てはいろいろの患や悩みがある、その種々な人生の苦みや悶えは、他の神や佛に依つて分擔して救はれる譯ではない、

「唯だ我れ一人能く救護を爲す」

我れ釋迦牟尼が一人で護つてやると仰しやる。それは表面にはいろいろの神となり佛となりて働いて、釋尊の慈悲の分派としてそれ／＼の方が御活動になるのである。それを推功歸本してその本へ戻せば、唯我一人の御守護である。だから日蓮聖人は「持法華問答鈔」の中に

「唯我一人の御苦みもやすみ給ふらん」

「如何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れんや」

と仰しやるので、いつでもお釋迦様は大慈大悲を以て吾等をお護り下される、唯だ我れ一人救ひ護ると仰せられて居るのである。それを考へないで、ナニお釋迦様に直接行くことはない、成佛の事はお釋

迦様に行かんならんけれども、女房が妊娠でもしたら觀音様を頼まなければならぬ、熱病にでも罹つたら鬼子母神様に頼まなければならぬ……といふ風に考へる人が多い。それが素人には解りがよくて宜いやうなものだけれども、併し本當に考へれば皆な本佛釋尊の大慈悲中に於てそれ／＼命令せられて、神々がお護り下さることもあらうけれども、根本は釋尊の大慈悲の御力なりと、その本に歸して信念するのが「救諸苦患者」とか「而今此處多諸患難唯我一人能爲救護」といふ經文の意味である。

そこに徹底する所が法華經の正信念といふことになるのである。それが分裂してしまつて、陀羅尼品を讀めば鬼子母神に行く、勸發品を讀めば普賢菩薩に行く……といふやうに、その讀むお經に依つて始終頭腦がグラ／＼變るやうに思ふのは、これは法華經を正信念して居るものではないのである。さうして又さういふ分裂的の信仰ならば、日蓮聖人が出現

せられないでも、日本ではズツと昔、菅原道實公の時代からそんな事は非常に流行つて居つたのである、それで法華の信念が事濟むならば、ナニも日蓮聖人が出る必要もなければ、諸宗に向つて折伏などをする必要はない。既にそんな分裂的の信仰ならば日本に弘まつて居つたのであるから、菅原道實の法華經、傳教大師の法華經でお茶を濁して置けば宜かつたのである。然るに日蓮聖人が一代にあれだけの法難を享けて法華經の正義を主張した以上は、内に信する所はモット正確なる信念を以て押切つて行かなければ、蚊蜂取らすになつてしまふ。内には信仰が頽廢して雜炊法華になり、外には諸宗の強敵を引受けるといふ兩難に陥つて、日蓮聖人の命に代へての主張といふものが、今日の日蓮門下に於て頗る不透明な状態になつて居ると私には思はれる、これは誠に心外至極の事である。

併ながら今までやり損うたからといつて、いつ迄

も此の状態でグズ／＼して居つては、日蓮聖人に對しても相濟まぬことであるから、何れの日かこれを矯正して眞に日蓮門下の進むべき方向を立てなければならぬ。それには一旦濁つて居つても、これを廓清することが大事である、チヨウド日本の歴史に於ても、皇室の尊嚴を冒して源賴朝が新府を鎌倉に開いてより七百年、政權武門に歸して、天皇陛下の御威徳は隠れて居つたけれども、明治維新に於て王政復古の大業を成し遂げたが爲めに、遅れたりも雖も遂に世界列國の競争舞臺に立ち得るに至つたのである。日蓮門下が今日まで永き流弊陋習に陥つて居るといふことは、一種の變態である、これを革正して、恰も我國の王政維新の如くに、本佛釋尊に歸つて一切の信仰を統一するに非ざれば、法華經を世界的に宣傳するといふことは出来得ない事である。それがやはり正信念である、さういふ事も併せて信念へて置かなければならぬ。法華經を正信念するとい

ふことは、唯だ一時の氣まかせや、自分の小さな安心の爲めに信するのではない、自分が有難いと思ふと同時に法華經を擁護して、さうして廣宜流布の一分に力を竭さうといふ事を考へなければならぬ。法華經は信仰と同時に直に所謂護法の精神に進むのであるから、その考の徹底したのが法華經の正憶念の特色である。

それは法華經の教を他に弘め及ぼして行かうとするならば、どうしても正しき意味合に歸つて行かなければならない。雜然たる今の雜炊法華のやうなものが、此の儘弘まるやうに考へて居る人があるけれども、それは弘まるに似て實は法華經の發展を阻止して居るものである。迷信といふものは、宗教學的に言ふとこれは宗教の病毒が發酵するのである、掃溜に微が生へたり、茸に似たやうなものが生へたりするやうなものであつて、宗教の内の腐敗が發酵して迷信といふものは起るのである。宗教が本當に緊

日本に猛然として興らんとして居る社會運動などは、すべての宗教を唯物史觀を以て否定せんとして居るので、その先棒となつて無佛運動といふものが起つて來て居る。近く東京の朝日講堂に於て、無佛踊りといふものを公演するといふ、それは何にも知らない娘達を寄せて來て、さうして佛敎を侮蔑したやうな踊りをやつて見せる、愚かな連中が口を開けて喜んで觀て居る間に、知らず識らず信仰心を破壊して行くのである、それは實に恐ろしい事であるけれども、併し日本の相當の知識階級の連中が平然として、「一つ觀に行かうぢやないか、無佛踊りはなかな面白さうだ」と言つて、親が娘を伴れてそれを觀に行くやうなことになるであらう。その無佛運動の佛敎に對する侮辱といふものは、今のやうな佛敎の信仰に於ける迷信や雜信のやうなものを捉へて、さうして科學的知識の上からこれを批判して侮辱してかゝるのであるから、今後の宗教運動にはさ

張して十分に洗練せられて居つたならば、迷信といふものは起らない、それが弛緩んで來ることこそ種々の迷信が生じて來る。日本では宗教全體の信仰が非常に弛緩んだからして、そこに天理教とか大本教とかいふやうな發酵性の宗教が勢力を得て居るのである。日蓮門下にいる／＼の雜炊的信仰が起つたのも、日蓮主義の教學が緊張を缺いて、その中心思想といふものが力を喪うた時、迷信雜信といふやうな、宗教學に所謂發酵性なるものがそこに生じて來たものである。だからさういふものは非常に澤山あるやうであつても、微が生へたやうなものであるから、そんなものゝ多い寡いは少しも眼中に置く必要はない。設ひ少數者と雖も正義を信する者を得て、初めて法といふものは榮えて行くのである。

殊に今後の宗教の宣傳競争といふものは、一方には科學知識、一方にはいろ／＼感激なる思想運動が起つて、宗教を壓迫せんとするのである。今も將にういふ強敵の現はれて居ることも考へて、最も廓清せられたる健全なる方強き運動を起して、これに對抗して最後の勝利を得るやうに闘はなければならぬ。

又内に他の宗教との關係に於ても、何れの宗教も今や覺醒てさういふ問題に就ては意義を明かにしたる運動が起らんとして居る譯である。それは禪宗でも或は淨土門でも、基督教でも、皆それ／＼宗教の最も微妙な意味合を發揮して、さうして宗教的競争場裡に勝利を制しようとして努力する譯であるから、日蓮門下が唯ボンヤリして法華經を看板にして出て行つたところが、太刀打は出來ないことになつてしまふ。チョウド精巧なる機械の共進會のやうなものであるから、いろ／＼紡績機械などの精巧なものが出品されて居るところに、昔のお婆さんが車を廻して絲を紡ぎ居つたやうな器械を持ち出して「これが私の方の自慢の品です」と言つたところが、

到底問題にはならない。どうしても現代の文化に處して行くには、外にはいろ／＼の思想に對抗し、内にはあらゆる宗教に對抗して、而も法華經主義、日蓮主義は最も優秀なりといふ事を理想して、さうして今後の競争場裡に立たなければならぬのである。その代りに斯様な意味に於て健全なる將來の宗教として、その見本として今の時代に競争せられて行くものは、それを奉ずる信者の數の多寡などに依つて決するものではない。これが武力の競争でもするならば、兵隊の數に依つて勝敗がきまるといふ事があるけれども、宗教としての當否を今我國に於て決定せんとするには、第三者が冷靜にこれを判斷せんとして居るのであるから、或は教育家の方面に於て、或は爲政者の方面に於て、又一般の識者階級に於て、宗教といふものに關する調査も起つて來る、宗教の取捨に就ての意見交換も必ずや起つて來るに違ひない。その場合に今言ふ理想的なる、完備したる宗教

として打つて出れば宜いのであるから、現在に於て數は寡くとも決して慨くことはないのである。日蓮聖人の主張が例へば立正安國の主張であつたとするならば、その正しき意味の主張を維持して居る者は一千人であらうが一萬人であらうが、將た百萬人であらうが、その信奉者の數を調査して而して後に日蓮聖人の立正安國の主張が良いとか悪いとかいふ事を決するのではない、その主張の内容實質に於て決するのである。だから今日は日蓮門下の少數者どもも、これが日蓮聖人の本旨の通りである、これが法華經の教の通りであるといふ見本を作つてさへ置けば宜しい。共進會へ出す機軸の見本品は、澤山ならべないでも、三台か五台陳列すればそれで眞價はわかる譯である。

斯ういふ點に於て正々堂々と法華經の眞價、日蓮聖人の眞意を發揚するやうにしなければならぬといふことも、正憶念する必要がある。それが法華經に

對する正しき考へ方である。唯だ掃瀆に微が生へたやうなものでも數が多ければ宜いといふやうなことを妄想して居ることは、法華經に對する誤解であつて正憶念ではない。因より法華經は正義の主張を貫

るゝに足らぬといふのが、吾等の信念であらねばならぬ。

四、題目の釋尊

るのであつて、それが爲めに六難九易も説かれたのである。涅槃經に於ても爪上の土に比してある、譬へば栴檀香木の如きもので、分量は餘計は要らない、その代りにこれを焚いて見ろ、むかふで薪を百貫焚いても、唯だ煙たいばかりで何の香もないが、こつちは僅かな破片を焚いてもその芳香は覆郁として周圍のものを悉く薫化する力があるぞ、故に量の多少を以て決すべきものではないといふ事を、涅槃經に於て懇々と遺訓されて居るのである。その意味に於て正憶念といふことを極く嚴肅に考へて、ナニも信者の仲間が多いといふ事のみを悦びとする必要はない。吾等の味方は本佛釋迦如來である、日蓮聖人の教に適つて居れば天下すべて敵になると雖も、恐

そこで釋尊を中心にして吾等は一切救はれるものぢやといふことを最も鮮明に考へて行くことが大事ナンである。日蓮聖人の信念は即ちそれである、日蓮聖人の信仰を告白せられる大切な場合には、必ずその意味が現はれて來るのである。口に唱へる言葉は南無妙法蓮華經だけれども、その唱へる意識が何であるかといふことを能く考へなければならぬ。頭に座に坐られた時にも、口には南無妙法蓮華經を唱へられて居るけれども、意はどうか考へられて居るかといへば、今日蓮が頸を斬られても決して嘆くことではない、我は本師釋尊の佛勅を蒙つてはたらい居るのである、その佛勅に反かないやうに一身を法華經に捧げて居る者である、くさき首を法華經に捧げ

て金色の如來となつて釋尊の御前に歸ればナニも嘆くことはないといふので「これほどの喜びを笑へかし」と言はれた。さうしていよいよ「頸が斬れなかつた時の喜びを言ひ現はされては『慈父大覺世尊がはらせ給ひしか』と言はれて、日蓮はモウ必然頸斬られるのであつたけれども、お釋迦様が日蓮の身代りになつて下さつてそれで自分が助かつたのかといふ風に、一番に感謝の辞を述べられたのが釋尊に對してであつた、その場合の日蓮聖人の御心持を吾等は能く味はなければならぬ。それを唯だ南無妙法蓮華經と言つたから助かつたのちやと言つて、そこに何等の意識する所なく、所謂禁厭のやうに「南無妙法蓮華經……キウ／＼のブイ」……それで萬事が成就するといふ風に考へて精神の空虚であるといふことは、甚だ幼稚なことである。南無妙法蓮華經を唯だ禁厭の言葉のやうに思つて、何等の内容をも意識しないやうな信念を以て今後やつて行くならば、それ

は實に低級極まる俗信に墮するものであつて、宗教學上に於ては左様なものは無價値なりといふレッテルを貼られてしまふのである。

日蓮聖人の信念は決して左様な低級な、内容の空虚なものではない。だから佐渡ヶ島にお在になつて雪降り積る程に居られても、法華經勸發品の文を始終考へられて、勸發品には佛が衣を以て覆はせたまふといふことがあるが、今この雪は釋迦牟尼佛より贈られしものかと言はれて、雪が自分の衰の上に降り積つて居るのを見て、これは佛様より贈られた美しい衣であるとして悦ばれて居るのである。その釋尊に對する情操が如何にも尊いのである。これは決して日蓮聖人が氣が狂つた譯でもなければ、負惜みでもない、佛が衣を以て覆ひたまふといふ經文があるから、雪を見て直ちに、これは美しい衣だと思つて悦ばれたので、そこに佛様と心が通つて居る譯である。日蓮がいま佐渡ヶ島の雪の中に閉籠めら

れて法難と闘つて居るのも、お釋迦様の御恩を想へばである、隨つてお釋迦様の方からも、自分が眠つて居る間もこんな美しい衣をお贈り下された「衣を以て覆はせたまふか、ねんごろの義なり」如何にも有難いことであると言つて、涙を流してお釋迦様に感謝せられたのである。さういふ心持を以て口には南無妙法蓮華經と唱へられるのである、そこに南無妙法蓮華經の聲があつたからといつても、日蓮聖人の心持は釋尊に對して感激して居らるゝのである。だから塚原三昧堂の一隅にも「本より持ちたりし立像の釋尊を安置し奉る」といつて、伊豆の伊東に於て伊東朝高が海中出現の釋尊の像を日蓮聖人に捧げた、その隨身佛の釋尊を佐波までお持ちになつて、それを塚原三昧堂にも安置せられた。さうして日夜釋尊に奉侍せられて、釋尊に對して南無妙法蓮華經と唱へられて居つたのである。

やうな議論が變な事になつて起つて來たけれども、それは唯だ末學の穿鑿であつて、日蓮聖人は法本尊だの、人本尊だのといふやうな言葉は、御遺文の中に言はれて居ない、唯だ釋迦如來に對して南無妙法蓮華經をお唱へになつて居る譯である。この釋尊と題目との關係は、吾輩が平生詳細に説明し盡して居る事である。他の多くの人達は……粗雑に考へていゝ加減な事を言ふのである、それは日蓮教學を眞劍に研究しない者の言草である。南無妙法蓮華經といふ言葉とお釋迦様が離れてしまつたならば、日蓮教學といふものはその時にモウ亡びて居るものである、今まではその亡びた行き方をして居るから、眞宗の念佛の爲めに逐まくられるやうな事になつたのである。モット早く日蓮門下が覺醒めて、少くとも徳川氏の時代に、今吾輩が絶叫するやうに、南無妙法蓮華經は本佛釋尊に對する信念なりといふことをハッキリして、これを廣く世に宣布たならば、

淨土宗や眞宗などが今日のやうに跋扈することは出来なかつたであらう。それを日蓮門下に人なく、内容の空虚な、禁厭みたいな意味に南無妙法蓮華經を考へて来たから、自分の信仰の對象がハッキリしない、そこで周章へて帝釋さまに行つて見たり、鬼子母神さまに走つて見たり、フラ／＼して居つたものであるから、その虚を突かれて遂に今日のやうな情けない状態に成り行いてしまつたのである。

今なほ日蓮門下はその迷夢醒めざるが故に、眞の力が起つて来ないのである。眞に日蓮門下の僧俗が各々の小さな我執を捨て、チヨウド明治維新の際に藩閥を廢して萬機天皇に總攬せられるといふ王政復古の大業を成し遂げた如くに、日蓮門下一同が本佛に對する歸恭式を擧げるに至つたならば、一ペンに法華經の教は全世界に光輝を發するに至るのである。日蓮門下と稱しながらマゴ／＼して居る者は寧ろ足手纏ひで、法華經の發揚を妨げるものである。

我が爲めに説きたまへる大慈大悲の南無妙法蓮華經

と書かれて居るのである。お題目の上に「大慈大悲」といふ言葉が附けば、よほど其の意味合がわかつて来る譯である。觀心本尊鈔の結文に日蓮聖人が書かれた「佛、大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて末代幼稚の頭に懸けさしめたまふ」といふ、それが即ち「大慈大悲の妙法蓮華經」ナンである。壽量品全体の意味も即ち大慈大悲の妙法蓮華經になつて居る。この釋迦牟尼佛の大慈大悲を忘れてしまつて、妙法蓮華經が風來坊で飛び歩いて、何處へくつ附くかわからないといふ、所謂萬有神の題目となつて飛びまはるから、日蓮門下の信仰が實に低級な、眞言宗と相似たやうな事になつて行つたのである。眞言宗がお大師さま／＼と言つて弘法大師を尊んで大日如來が飛んでしまつたやうに、日蓮門下ではお祖師さま／＼と言つてお釋迦様が飛ん

る。どうしても壽量品、開目鈔等の大切な精神に基いて、本佛に對する歸恭式を擧げなければならぬ、さうして唱へる言葉としてはやはり南無妙法蓮華經で宜しいのである。さういふ事をハッキリと意識するのが正憶念である。

五、大慈大悲の題目

その事に就て、吾々が學んだ先輩の人の説を擧げるならば、品川の日受上人が「我此土安穩義」といふ書を書かれて居る、その中に、今いふ南無妙法蓮華經と釋尊との關係に就て非常に苦心せられて、能く自分の意見を發表せられて居る、その内容が、今吾輩の説く所と少しも違はないのである。であるから此の事は吾輩の新發見でもナンでもない、昔から偉い學者は此點に苦心してこれを講明せられたのである。その日受上人の言葉は、

「大恩教主釋迦牟尼佛、我を成佛せしめんとして、

でしまつた、さうして加持祈禱が本領かの如くになつて居るのである。眞言では南無大師遍照金剛……カイン／＼とやつて居る所に、眞言の宗教的本領といふものは滅びて、實に低級淺薄なる迷信に墮して居る。法華宗の千箇寺詣りはナンメウ／＼ドンドコ／＼太鼓ばかり叩いて居つて、そこに釋尊の威徳は全然忘れられて居る、これは全く眞言的に墮落して居るものである。眞言はあゝいふ風な萬有神のものであるから、臺所に行けば荒神さまを祀つて居る、雪隠に行けば烏瑟沙摩明神とかいつて雪隠の神様を祀つて居る、何にでも神様々々といつてむやみに祀りちらかすのである。今の法華宗がそれと同じで、むやみやたらに祀りちらして居る、本所の方にゃ行けば柳島の妙見さまといふのがある、そこには白い蛇が居るといふ、谷中には衛守稻荷といふのがある、東京市内だけでも法華宗に屬するさういふ崇拜物を調べたならば、それは實に迷信の標本と謂つて

宜い位のものである、今日の迷信研究家がいろいろ調べて居るやうなものは、大部分法華宗の寺院に附屬して祀られて居るものである。これから言つたらば、最も腐敗墮落したところの宗教が今日の日蓮宗であるといふことになつて居る。それは實に法華經を奉じ日蓮聖人を戴いて居るところの宗教として、残念至極の事である。

それは何から起るかといへば、南無妙法蓮華經に對する意識觀念の不透明より生じたことである。そこに於て受師の言はれた「大慈大悲の南無妙法蓮華經」といふことが、題目に對する正憶念である。日蓮聖人の聖訓を以て言へば

「暮れゆく空の雲の色、有明方の月の光までも心をよほす思ひなり……いかなる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れんや」

と仰せられる、それが法華經の正憶念の第一義である。口に唱へる言葉は南無妙法蓮華經で宜いので

眞言として題目を考へたのは、所謂佐渡已前の法門である、南無妙法蓮華經と言つたら必ず釋尊を念じて居るといふことではなければならぬ。これは大日經などを見たならば、すべてその拜む方に對して眞言がみな定まつて居る、不動明王を拜むには不動明王の眞言、梵天を拜むには梵天の眞言、普賢を拜むには智賢の眞言といふやうに、神に對してその名を稱へないで眞言といふものを稱へる、鬼子母神には鬼子母神の陀羅尼の眞言がある、南無鬼子母神と言つて拜ますして、泥履々々樓酸々々……といふ陀羅尼を稱へる。さういふ風にそれ／＼の神や佛に就て印と眞言といふものがある。だから釋尊を信するに南無妙法蓮華經と言つたからとて、ナニも珍らしい事でも不思議な事でもない、普通の事ナンである。その人を拜むのに、必ずしもその人の名前を言はなければならぬと定つては居ない、多くの場合はその人の眞言を稱へることになつて居る。そこで釋尊の一

ある、それを佛様に對して唱へて居るのだといふことをハッキリ意識しなければならぬ。南無妙法蓮華經は文字に書いて祀るよりは、もと／＼唱題といつて口に唱へるものであつた、それを又文字にも書かれるやうになつて居るけれども、大体は日蓮聖人の三大秘法の教から言つたならば、第一に本門の本尊といつて教主釋尊を本尊とする、第二に本門の題目といつて、これは天台傳教は自行のために唱へて化他のために唱へない、日蓮は自行化他ともにこれを唱へると言はれて居る、それから第三が本門の戒壇となつて居るのであるから、題目といふものは大体は唱題行といつて、唱へることが主ナンである。唱へるのは即ちその信仰を表白し、自分の信念を表はす言葉としてあるのである。それは大日如來を拜むには大日如來の眞言があり、觀音を拜むには觀音の眞言があるやうに、本佛釋尊を拜む眞言として南無妙法蓮華經といふ言葉があるのである。萬有神祕的の

番大事な教として説かれた法華經、法華經の中心思想を纏めて「妙法蓮華經」の五字にしたのであるから、その釋尊を信じ、釋尊の教を奉じて行くといふ信念告白のために「南無妙法蓮華經」と唱へて居るのである。釋尊に對つてこれを唱へるのがナニも訝しいことはない、「南無妙法蓮華經」と言ふなら法華經に向つて言ふのでなければ意味を成さんぢやないか……などと考へて居るのは、素人の何にもわからぬ者が言ふことで、それは皆一種の迷想である。であるから日蓮聖人は、これは釋尊に對しての持言眞言といつて、釋尊を忘れぬやうにするために南無妙法蓮華經と唱へるのであると言はれて居る。日蓮上人が「大慈大悲の南無妙法蓮華經」と言ふのも、「佛の口より此の經典を聞くが如し」と經文にあるとほり、南無妙法蓮華經と唱へれば、釋迦牟尼佛を見たとまつて、佛の口より此の妙法蓮華經を聞くのである、だから此の法華經を受持し讀誦し正憶念す

るとは、直に釋尊のことを憶念してさうして釋尊から直接その金言を承つて居るのである、南無妙法蓮華經と唱へれば佛に在せり、而して佛の大慈大悲より妙法蓮華經を我等に與へたまふ、その中に一切の功德、一切の力を籠めて與へたまふ、アラ有難や、南無妙法蓮華經……といふ感謝の言葉となり、さうして釋尊の方からは「汝能く持つや否や」と問はれるから「能く持ちたてまつる」と答へて、釋尊と直接に對談をして居る意味が、南無妙法蓮華經となつて現はれて居るのである。これは本門或壇の受戒の式から言うてもサウなつて居るし、三寶式から言うてもサウなつて居るのであるから、さういふ事がナニも新しい議論ではない、佛法の通則として起つて來る譯である。大体お經を讀むといふのも、佛様の前でお經を讀むのがナニも悪い事はない、寧ろそれが本則である、お經の大事なことは讀佛偈である、壽量品でも、これは佛様が仰しやつたこと

だから讀佛偈とは言はんけれども、その内容は、若しこれを聽衆の方の彌勒菩薩が言うたならば全文讀佛偈である。讀佛偈といふものは佛様の有難いことをお讀み申上げて行くのであるから、佛様に向つて言ふにきまつて居る。

その事は廣く佛敎のお經を見たならば能くわかる。又一切の他の宗教を見てもわかることである。基督教の聖書に書いてあることは、神様の有難いことを説いて行くのである、それと同じやうに阿彌陀經といふお經は阿彌陀様の有難いことを説いて居る、法華經は本佛釋尊の有難いことを説いてあるといふのは、不思議もナニもありはしない。コーランといふ回々敎のお經を讀んだならば、モウいきなり回々敎の信する神様の有難いことを卷頭第一に説くのである、我等の信する神、我等を護る神、我等は神を信じ、我等は神に導かれ、神に依つて救はれるものであるといふことが、即ちコーランの主意であ

る。それは當然宗教の經典といふものはサウあるべきものナンで、法華經といふものを餘りに釋尊から離して妙に考へ込んでしまつたといふのは、佛敎に於ける一種の病的經典崇拜であると謂はなければならぬ。

六、正憶念と福德力

それから第二に考ふべきことは、その信仰心から出てこんどは自分の修行といふか、實際に實行してゆくところのはたらきといふものを考へなければならぬのである。そのはたらきは、法華經の勸發品に依れば、前に引いたとおり「是の人は正憶念あり、福德力あり」と説かれた、その

「福德力」

といふことである。福德力といふのは人間が善い事をするのである、福といふのは「罪福」と對句になるので、罪といふことの裏である、だから罪をつくら

ないで善い事をして行くのである。福といひ徳といふのもやはり善い事をするのであるから、福德といふ語は今世間で普通に考へられて居るやうに、ナニか物質的に物を恵まれるといふことではない、福とは即ち善根功德を積むことを謂ふのである。だから「福德力」といふのは、その人が正憶念から出發して道徳をまもり、善を行ふといふことが福德の力といふことになるのである。さうして經文のその次に

「是の人は三毒に惱まされず、亦嫉妬、我慢、邪慢、増上慢に惱まされず」

といふので、三毒——貪欲、瞋恚、愚痴といふやうな煩惱の惱みを受けぬやうになり、またむやみに人の善い事を嫉んだり、自分が慢心を起して苦しんだりするやうな事がなくなつて、各々その分に安んじて泰らかなる精神の裡に善い事を行ふ人格が出來て行くのである。さうして尚ほ

「是の人は能く普賢の行を修せん」

とある、これは菩薩行を謂ふのであつて、普賢といふことは菩薩行の完成して行くことを申すのである。「普」はあまねしといふのだから完成である、「賢」は聖に亞ぐといつて、完成の次に在るものである、普の方から言へば十五夜の月、賢の方から言へば十四夜の月といふ意味で、菩薩行がだん／＼完全に近づいて行くことである。それが全然十五夜の月になれば佛であるから、普賢といふのは佛と、菩薩の最高の者との中間といふか、十四夜と十五夜の月の間といふやうな所を謂ふのである。即ち菩薩行の完成に向つてだん／＼進んで行くのである、無論一べんにそこには行けないけれども、だん／＼と少しづつでも善い事をしてさうして菩薩の修行を完成して行かうとする努力に現はれて行くのである。

人はその力に應じて善といふものを勵まなければならぬ、自分の堪へたる所に依つて善を行つてゆ

のではないけれども、人間が親切の志を懐いて行くといふことになれば、次第に仁は行はれて行く、その親切の行ひに大きい小さいはあるけれども、それは其の人の全幅の力が現はれればそれで宜いのである。女中なら女中は何も大した事は出来なけれども、臺所で働くに就て親切に考へて、主人の爲になるやうにといふので、朝は早く起きて御飯を上手に炊いて、そこらを綺麗に拭き掃除をして、寒くとも家の内を能く片づけて行くといふ風に、満腹の誠心を籠めて親切に其の家の爲に盡して居れば、實に感心な女中であるといふことになつて来る。女中に向つて天下の政治を執れどか、萬巻の書を讀めどか言つたらそれは出来ないけれども、臺所の拭き方をいゝ加減にやらすに親切を籠めて拭くといふ事は、心懸けに依つて直に出来る。そこに英雄豪傑が天下國家の爲に盡すのも、女中が誠心を籠めて臺所の隅を拭くのも、同じ親切の絶対價值といふものが現は

く、さうすると面白いもので、人間の志といふものはエライ力を現はして来るものである。つまらぬいやうな人間でも志を立て、善い事をしようといふことになる、相當な善い事が出来て来る、立派な人でもボンヤリして居ると何にも出来ないで一生を空しく終るのである。實に人間の立志といふものは尊いものである、日に僅かづつの善を積んで行つても、所謂塵も積つて山となるといふ譯で、終ひにはその人はだん／＼立派な人になることが出来る。であるから孔子も論語に「能く一日其の力を仁に用ふるあらんか、我未だ力の足らざる者を見ず」と言つて居る、仁を行ふといふことは、孔子自らも難しとすると言つて居るやうな譯で、サウ簡單に行ける譯のものではないけれども、併し仁を行はうといふ志を立てさへすれば、力の足らない人間はあるものではない、誰でも必ず出来る、孔子が言つたのは實に格言である。サウ一べんに完全に仁が行へるも

れて来るのである。さう教へるのが眞の宗教であり道徳である、「ナニニ人間は善い事なんかナカ／＼出来るものではない」と言つて頭から侮辱してかゝるのは非常に悪い事である。現代は相當の學問のある人でもそんな事を言つて、「どうせ人間は食ふ事で喧嘩ばかりやつて居る、人が仁を行ふなんて、そんな事が出来る位なら心配はない、こんなに法律を作つて取締つてもナカ／＼喧嘩は絶えんやないか」といふやうに、人間はどこ迄も罪惡性のもので取柄が無いやうに言ふのであるが、さういふ風に扱はれると人間といふものはだん／＼悪くなつてしまふ。子供を躾けるのも、「こんな奴は口で叱言を言つた位で背くものか」と言つて横面をバーンと殿つたり、「貴様は飯を食はさぬやうな目に會はしてやる」と言つて、押入に押込んで心張棒を支つたり、さういふ事をやつて行けば行くほど、その子供は不貞腐れの料簡になつて悪化して行くのである。それ

を「イヤ〜さうではない、お前は立派な子供だ、まアこつちへ來な、話があるから……」と言つて優しく導けば、「ハイ」と言つて言ふ事を肯くやうになつて來るものである。どこ迄も宗教や道德の教化は、そんなにもやみに人を押へ込むやうな事では駄目ナンであつて、やはり其の人を啓發して行く所に尊さがあるのである。現代の日本を救ふに就ても、これを絶望悲觀の状態に見るべきものではない、もど〜立派な國民であつたのが、少しの心得違ひに依つて今日は殆んど絶望かの如き有様になりつゝあるけれども、ナーニ心機一轉すれば舊の立派な國民に歸り得るのである、吾等の努力足らざるものありとして奮闘力戰して行かなければならぬ、そこに少しでも悲觀に陥つたりへこたれるやうな所があつてはいかぬ。今この「普賢の行」といふ經文もそこから出て居るのであつて、決して徒に難かしい事を言ふ威し文句ではない。

この意味合を正憶念して、佛様に護られると同時にさういふ善を行つてゆくのである。それは勸發品の少し前の所にも四法成就の文といつて「一には諸佛に護念せられ、二には衆の徳本を植ゑ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發すなり」とある、この四つの事柄を得さへしたならばそれが法華經の全体であると説かれて居るのである。諸佛に護念せられるといふことは、諸の佛とあるけれども、前にいふ壽量品の本佛の意義から言ふと、諸の佛は水に映つたる月であり、本佛は天の一月である、諸佛に護られるといふことは本佛釋尊に護られるといふことである。それは開顯の智眼に約して法華經を講ずる日蓮聖人の教の下に於ては、諸佛とあつても本佛なりと解釋するのが當然である。諸佛がバラ〜になつて多神教になるならば、壽量品の顯本も要らなければ開目鈔も要らないことになる。だから

その教を日蓮聖人から聞いて、さうして法華經を解釋して行くのである。たゞ日蓮聖人が有難い、お祖師様〜と言つて騒いだところが、諸佛とあればやはり大勢の佛だ……といふのでは、ナニもお祖師様の教を奉じて居る者とは言へない、口先ばかりである。日蓮聖人の尊いのは、壽量顯本の經旨を以て法華經の全体を貫き、常に法華經のみならず一切經を貫き、一切の教學を貫くところの最高指針として、壽量品の顯本の經旨を發揚廣宣せられた所に、その眞價が在るのである。だから諸佛に護念せられるとは、本佛に護念られるのであるといふことを能く考へるのが、第一の正憶念である。

續いて諸の徳本を植ゑるといつて善を行ふこと、正定聚に入るといつて善を行ふ仲間と協力して行くこと、さうして一切衆生を救ふといふ親切の心を發して行くこと、此の三つはいづれも道德的の事を言ひ現はして居るのであるから、四法成就といふけれ

ども、要するに本佛に護つて貰ふといふ宗教的の信念と、諸の徳を行つて行くといふ道德的の行爲とを考へたときに、法華經は其の人のものになる、これが法華經の正憶念である。信心したら病氣がなるとか、商賣が繁昌するとか、さういふ事は信仰の御利益として第二義、第三義のものである、さういふ御利益も出て來るけれども、この大切な諸の徳本を植ゑるといふことを考へないで、「どんなものでせうか、信心したら横着して居つても商賣が繁昌しませうか」……などと云ふのは、實に低級なる觀念である、そんな見つともない事が法華經の前に言へるものではない。横着したら商賣は流行らない、不養生をしたら病氣になるにきまつて居る、何を不心得の事を言ふか、そんな事は學校の先生でも教へて呉れる、お釋迦様を俵つて聞く必要はない。宗教は精神的の慰安から來るのである、商賣は商賣の道に依つて勉勵努力して行かなければならぬ、その事は

天風三萬里紀行 (其六)

小林 日種

六、大連 附近

五月二日

早起、松浦與三郎氏苦心經營に係はる煉瓦製作所の工場を參觀した後、紀念撮影を爲し、直ちに大連警察署よりの迎への自動車に打乗り、三里餘を疾驅して大連へ歸つた。

警察には既に署員全部が待ち受けてゐて、着くや直ちに講演した。演題は『餘裕と眞剣』と云ふのであつて、責任觀念の養成がその主なる内容であつた。署長高山勝司氏は千葉縣君津郡の出身で、巡査から苦闘して今日の榮えある地位を贏ち得たと云ふ謂は、立志傳中の人物で温情溢るゝ稀に見る好箇の紳士であつた。講演が果て、後、同氏の案内で、袁乃寬氏を訪問した。氏は人も知る如く袁世凱氏の嗣子で、北京に宏壯な邸宅を有してゐるので有るが、今

次の政變で大連へ亡命して來てゐるのである。聞く所に據ると、財産なども、現政府の或る種の人達にすつかり横領されてしまつたとかで、その爲で有らう、邸宅なども、さ迄驚く程のものでなく、殊にその衣服は、木綿の汚れた粗末なもので、余が訪れた時は、折柄、觀音經の書寫をして居られた。

あまり口数はきかず、入ると直ぐに物馴れた調子で握手した。悪意と云ふものを微塵も顔に見る事が出来ない眞に好々爺と云ふのは、こう云ふ人の事かと思つた。

野澤佛吾氏を知つてゐやしないかとフト思つたので、話の序でに訊ねてみたら、知つておると答へた。

辞去するに際して余の書帳に十句觀音經を書して贈られた。

それより前大藏大臣周善培氏を訪問した。氏は佛敎信者として有名な人で、その方の著書を澤山出してゐる、目下も大部なものを著途中とかでその草稿の一部を見せられた。實に能辨なものでその言題はしの巧妙なる、外交辭令としての支那語は實に良いものだと思つた。

氏の余の書帳に書して贈られたるは左の句である。

『是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減』

それより李鴻章氏の嗣子、李成友氏邸を訪問したが、此の方は合憎不在だつたので、やむなく割愛し、直ちに老虎灘へ赴いた。老虎灘はその名の如く海岸奇巖に富み、その狀恰かも猛虎の天空に嘯くが如き形狀なるを以てかくは名附けられたもので、大連郊外一里強の地點で、星ヶ浦と並び稱さるゝ景勝の地である。

料亭海氣館樓上よりは一眼に見渡され、折柄、櫻花満開、花片散りて海水に入り、波濤、落花を乗せて遠く去る、花や繊細、景や豪宕、眞に滿洲らしくていゝ嘯と嗟嘆した。此處にて高山署長より、ゆる

善美を盡くした晝餐の御馳走に預り、充分に良い氣持になつた後、更に自動車を命じて、南開苑に赴いた。これは當地一流の茶寮で、大連にもこんな場所があるかと怪しまれる程の幽邃閑寂な場所を占めて建つてゐる。

今日は警察婦人會の年一回の集まりを、折柄來連中の私を聘して、此處で講話を聞こうと云ふ企て、既に午前中から、行事が催されてゐた。

『日低ければ虹高し』と題して講話を爲した後、又候御馳走を頂戴し乍ら歡語した。夕景迎への自動車が來たので大連寺へ赴き、修法の後『日蓮主義とは何ぞ』の題下に滿堂の聽衆に晩く迄語つた。

五月三日

午前中は、書信を認むる等に費やし正午からは沙河口瀟鐵工場に赴いた。小憩の後、講演は午後一時から二時迄、キツカリ一時間行はれた。モーターの運轉を止めて、工場幹部から現場職工の全部迄が作業服の儘で廣場に集まつて聞こうと云ふのである。その數五百を超え、この一時間の休業によつて蒙むる數字上の損害約三萬圓と聞かされた時は驚いた。

それだけの犠牲を拂つて講話を聴取しやうと云ふのであるから勢ひ説く者も聴く者も眞剣にならざるを得なかつた。

余が最後に時計を示しつゝ、「約束の時間より超過する事實に三分である、諸君は余に對する同情として、此の時間を取り戻すべく各自駆足にて部署に就かれむ事を望む」と言放つや、飛鳥の如く、雪崩を打つて場外に轉び出でたる人々の手によつて、逸早く、スイツチはひねられたものと見え、警笛と共に轟々たる、エンヂンの音、モーターの響、忽ちにして耳を聳するばかり、此時、余は未だ席に戻らず、演壇を下らんとするや幹部四五、走りよりて「御苦勞でした」と云ふ。余は危く、涙を落さんばかりに言葉もなく深く感動してゐた。

並木工場次長の案内で、工場全部を參觀した。主として汽鐘車の製作で、それが悉く天井にブラさげられてゐて、ハンドル一つまわすと、羽毛のやうに軽々と上下に浮動するのである。

大蓮寺へ歸ると、川上新吾君が待受けてゐて、何でも彼でも若林不比等君の農場へ行つて呉れと、云

ふ、聞けば若林君は余の來連を非常に喜んで、直ぐにも行きたいので有るが何分にも面行で行きかねるから是非そちらから來て貰ひたいと云ふ傳言なのである、勿論快諾して明後日行く事にし、汽車の時間の打合せをした。川上君が歸ると間もなく放送局から迎えるの自動車が來た。大連放送局は、郵便局の一部に間借りしてゐるやうな格好で、あまり大きくはない。放送前に紀念の撮影を爲し、七時半からの放送をカッキリ八時にしまつて大急ぎで自動車に飛び乗つて、沙河口へ急いだ。運轉手が支那人でどうしても行先のお寺がわからない、辛ふじてそれらしいものを見つけて行つて見ると、堂の内も外も人で一杯である、直ちに、小憩の間も無く講演した。余の少年時を知悉して居る例の小芝君の母堂などのお顔も見え、その外管口煉瓦製作所の人々や、蒲鐵工場の人々、大蓮寺の信徒諸氏等大分知つたお顔が見え、オヤ／＼と思つて自然話に實がはいつた。

十二時過ぎ新築の大法寺の客殿に、へト／＼になつた身を横たえた時、今日は良く健闘したナと我が身をいたはりたいやうな感慨を催はした。

五月四日

起こされて眼をさますと早や迎への自動車が來たと云ふ、大急ぎで朝食を取つて、中野鳳泰師も行くと云ふので二人して埠頭事務所の中にある水上警察署へ赴いた。

署長寺田良之助氏の丁寧なる挨拶有りたる後余は「臆病退治の方策如何」の題下に、信念涵養の必要を力説した。終つて紀念の墨痕を求められたので拙筆を揮つた。

午後からは中野師の案内で、放射線形式の街區の都心を爲す大廣場や、中央公園や、電氣遊園やを散策した。

午後六時から太田誠氏のお迎えを受けて、振東社へ赴き、七時より大陸青年團々員諸氏へ「神洲必ず不滅なり」の題下に約二時間餘の講演をした。

五月五日

鯉轎り此處にも日本男兒有り。

誰やらの句にそんなのが有つたやうな氣がして思はず口ずさんだ。汽車には朝の十時に乗つた、どの驛にも、どの驛にも、驛の近くの家には必らず鯉轎り

が見えた。それを眺めてゐると何だか急に淋しくなつた。子供の事を思ひ出したのである。此の汽車はこれから南へ北へ走りつづけるのである、然しこれから先き、いくら汽車が來ても南の國——日本へは、まだ——歸る事が出來ぬのだと思ふ、と、胸がつまるやうになつた。

得利寺へ着いたのは三時過ぎで有つた。こんな、みすばらしい町にでも何か用の有る人がゐると見えて、かなり大勢の支那人が降りた。

中には繪に見たそのまゝの滿洲貴族の女——頭に大きな花模様繡のした黒い板のやうな飾り物を載せて、落付いて歩いてゐるものもあつた。婆さんが頭に赤い花簪を挿してゐるものもゐた。例によつて蒲團を擔いでゐる苦力も大ぶん降りた。それ等は概ね逞しい體軀をしてゐた、稀には日本人もその中へまざつて降りた、けれどもそれが何だか淋しさうに見えた。肩をすばめて歩いてゐるものも有つて、大きな支那人の間を、チョッコ／＼と二十日鼠のやうに縫ふて通るのはいゝ見榮ではなかつた。

勿論私もそのみすばらしい中の一人であつた。い

や最もみすばらしい一人で有つたかも知れない。
私はボンヤリ立つて瀛車を眺めてゐる自分を見た時、名ばかりの驛長室の人氣の無い所に吹きさらされて立つてゐる自分の姿がごんなに不憫に見えたかわからなかつた。

その時で有る、魁偉な容貌の舞男が、ムズと私の手を掴んだ。掴んだのではない、正しく握つたのである。

「ヤア」

私も反射的に。

「ヤア」と言つた。

若林君は直ぐ様、私に多くを言はせないで無理に引張るやうにしてホームへ連れて行つた。

私の乗つて来た北行する瀛車と入れ違ひに南下する瀛車が着いてゐたのである。さればこそ降りる人の多かつたのも道理と、自分の迂闊さに急に笑ひたくなつた。

「これが僕の案内です」

此處でも私は何氣なく。

「ヤア」と言つてしまつた。そして次の適當な言葉

を考えてゐる内に、奥さん——委しく言へば昔の川上初枝嬢、今の若林君の愛妻初枝さんの乗つてゐる汽車が、遠慮なく走り出してしまつた。仕方が無いから手を振つて頭を無暗に下げた。自分では察して呉れと云ふ心である。

「随分變つたでせう、よくわかりましたな」と、若林君がしみじみ云ふ。

それは此方でも言ひたい事である、滿十年遭はないのだから、先方だけが變る筈はない。

「僕も名前を變えましてね」と、逆襲に出る。

「新聞で見たんだが、どうしても見當がつかかなかつた。」

さうで有らう。先方は自然的にだけ變つたので有るが、僕の方は人為的に變えてゐる、矢張り僕の方が餘計變つてゐる。

「時に、病氣は」

「ウン、親爺の病氣で病苦を忘れた形さ」

君の岳父、川上賢三翁の病篤い事は、新吾君からよく聞いてゐた。

「君の名前を親爺が知つてゐたと云ふ話だ、これは

何でも新聞に關係してゐる人だつて。」

「痛むのかい」

「いゝや」痛むで有らう事は、荒尾讓介張りの顔の半分を覆ふて大きく膏藥が張つてあるのでわか

る。そのうちやつと貨物列車が来たのでそれへ乗つて關子へ向ふ。

關子は驛では無い、貨物列車さへどまつたりとまらなかつたりする儂なげな乗り場である。日高見農場は其處から直き近くであつた。五六人の遅しい青年が出迎えに出てゐた。

これが多分今宵の聴衆なのであらう。と楽しく空想し乍ら人氣の無い原を歩いた。それ程に人を懐かしがらすにはゐられない程淋しい高原なので有つた。

伏起して限らない白禿の蓮山を見渡した時、私は自分の身體がこのまゝ化石になるやうにさへ思はれた。全々「人間」の住んでゐない世界でもあるやうな氣がして、たゞ譯もなく「高天原」を聯想した。露西亞の作家の作品の中にも出て來さうな風景であ

る。

夕陽は一種特別の感じを與へた。何うといつて一寸言ひにくい胸が痛い程感傷的になつた。赤い夕陽が禿げた山々を赤色に染めた工合は、悲しくもあり、淋しくもあり、「赤い夕陽の滿洲」の軍歌が切實に感ぜられ、大地に向つて、夕陽に向つて、瞑目合掌して祈を上げたいやうな心地さえた。内地ではこんな感じは一寸經驗されまい。

「此のあたりは狼が時々出ますよ」と若林君が言ふ。さも有らう全く違つた世界と、違つた環境である。夕暮の静けさと、寂しさと大きさとが、ちつと大地を壓し鎮める沈黙の莊嚴に充ちて來た。山莊と云ふにふさはしい若林君の邸宅に私はどんなに懐かしい思ひで飛び込んだかわからなかつた。

アカ／＼と露西亞風の大型のランプが點けられ、晚餐が食卓に運ばれた。

主人側が三人、客が一人食卓についた。聽て若林君の音頭で、神々の御名を呼ぶ祝詞が言はれた。

そして不思議に、それが此の食卓と此の家と、人ごとに良く調和してゐる一種嚴肅な氣分を客の胸に與

えずにはゐなかつた。

食事がすむと講話をこの事であつた。

「聴衆は？」

「聴衆はこれだけ」澄ました顔で云ふ。

「一騎當千の武者ですよ、僕達は。」

「成程、萬夫不當と云ふ事も有るからな」

勢ひ込んで客が話し出さうとすると、主人がおつとりした聲で語り出した。そしてそれが大地の上に打ち建つてゐる四壁のコンククリートの家に音楽的によく響き渡つた。客は思はず言ふのを忘れて聞惚れた。その主張の一つ／＼に深き體驗が織り込まれてゐる、その説明の個々に強き自信が打込まれてゐる、言ふ一つ／＼が背景に當つてゐる、語られる個々が肺腑を衝いた。故に、

此の良き傑れたる友と、此の友の良き感化を十二分に受けてゐる此の二人の若人とに私は何を説き何を語るの必要が有らう。

私はたゞ黙して聞き入るのみだつた。貪るやうに喘ぎ求めて聞き入つた。

寔に彼の生活には、都會の或者のやうな絢爛さは

○知法思國會街頭布教大運動記(其二)

●第十一日

場所牛込區神樂坂毘沙門境内、前日の雨に今日こそはと意氣込んで居たら又天候がグヅツイテやる可からざるか本部では未だ決定しない、其の内に四方から聞ひ合せの電話が掛つて来る處へ和賀義見氏が来る山口智光氏が来る寛氏が来る、かなり危険性はあるがヤル事にしやうと五時四十分本部出發、神樂坂毘沙門堂に着くや例の如く本會の大運動旗を先頭にあの周囲を宣傳隊の示威行進一廻り終つて七時廿分開會山口智光氏本運動の要旨を述べ次に日蓮宗の奥野學進氏立ち次に猪俣金太郎氏、磯部滿事氏、寛義章氏次で海軍少將岩野直英閣下立つて斯の如き國狀を現出せしめたは一に我等先輩の罪なりと冒頭し大いに慚愧反省して國民諸君の前にお互ひの輕談危激浮華放縱を誡めざる可からずと説かれ梶木顯正氏次で「學者國を危ふする」とマルキシズムの未完成未成品なることを説き未だ研究室より出す可らざるものなる事を痛評し次に北條平太郎氏、和賀義見氏終つて司會者山口智光氏閉會を宣し、續いて矢野茂閣下發聲、天皇陛下萬歳を三唱して散會、別働隊として小西日喜師の率ひる一隊は本田健二氏、田中道爾氏、中村清一氏、一本木悦太郎氏、綿引弘氏等神樂坂通りの中央に陣取つて開會主任講師小西日喜師一時間半に

ない。活動はない、喧嘩はない。

彼はたゞ、土に親しみ大地と相撲をとつてゐるばかりである。けれど、それにも拘らず私は彼等の生活に於て實在を感ずる、彼等の栽培するものが太陽にはぐくまれ、大地に根ざしてゐるやうに、彼等自身實に實在に根ざしてゐる、彼等の強味、尊貴さも實に此處にあるのである。

高原の夜の眠りを貪るべく床の中に入つてからも、そんな事を思ふて、なか／＼寝付かれなかつた。我こそは舊名の智道が日種になつたやけの以外に、幾許の變化、幾許の向上が有り得たで有らうか、遭逢し得ざりし十年の日子に於て、最も良き變化、貴き向上を爲し得たるは我に非ずして彼、口惜しくも事實は嚴として彼の向上と進歩を物語つてゐる。眞に欽羨し、畏敬するの情に堪えなかつた。感謝。

互る大熱辯を以つて大衆の胸に深く大感激を與へられた。尙各所共本會のパンフレットは大歡迎で何時も部數の少ない事が遺憾である。當日の應援者は、佐藤梅太郎氏、田島義潤師、川奈鏡作氏、後藤伸子氏、櫻井源次郎氏、田中久照氏、黒須源太郎氏、添田吉美氏、寺澤萬三氏、山本政次郎氏寛銀二郎氏、高見澤巖氏及報恩閣の耕一君に隆之助君五島一雄君それに婦人會側數名其他多數來援された。本部に引揚げたのは夜十一時過ぎ雨が靜かに降り出して來た。

●第十二日

場所、市川立正會館、天候陰曇、本部を午後四時半迎ひに來られた田口公信氏、鈴木秀學氏、伊藤氏と共に寛義章氏、梶木顯正氏、富田顯道氏、高見澤巖氏等大太鼓提灯等を携帯して出發、同六時會場に着くや立正會員諸君と一致して直ちに宣傳隊を組織し例の如く大運動旗を先頭に全町を一周シト／＼と降り出した雨の中をもとせず羽入田真人氏、寛義章氏、鈴木秀學氏のメカホン宣傳宜敷同七時十分會場に戻れば磯部滿事氏の開會に羽入田真人氏、田中道爾氏次で松岡林造氏續いて本多日生程下「三教の精髓と日蓮主義」の題下に約五十分停々として國民教化の眞價を説かれ「吾が輩は九時十分の汽車で歸るからと云ふのに若い者達は何うしても九時十分の列車に乗れと云ふので多數決で自分の方が負け

たからこれで車も来て居る事故講演を止めて歸るとチャリ
を入れられ、終つて眞義章氏ジャズとカフェーの話に熱を揚
げ山口智光氏次で梶木顯正氏閉會之辭を述べて聖壽萬歳を發
聲散會したのは九時半であつた。雨はしきりに降つてゐる、
當夜の來聴者は二百餘名、應援者は渡邊光雄氏、竹内彌一郎
氏、平林隆作氏其他市川立正會員多數の方々であつた。

●第十三日 (晝 間)

天候曇り、今日は淺草新福井町報恩閣を會場として統一團
の第二日曜講演會に知法恩國會の教化講演會を合併させ「教
化大講演會」と銘打つて午後一時半から同所に開催した、報
恩閣の果徳婦人會員は黒紋付きの揃でかひなく立働かる
は目立つ、當日のプログラムに依り山口智光師の開會
之辭に次で一本木悦太郎氏信仰の體驗を語り同く眞義章師立
つて「最大なる喪失」の題下に現代人の僅少なる時間と僅少な
る金とに依つて最大なる享樂を得んとするジャズとカフェー
は現代生活の二大表現なり、と斷じ信仰なき生活は終ひに狂
躁なるジャズとカフェーに馳せしむと結び梶木顯正師續いて
「信仰の委相」と題して約廿五分力説、次に田中道爾氏「現下
の國狀を直視して」の題下に熱辯を振ひ、磯部滿事氏立て「門
下の責任」を論じ、本多親下「國民教化と日蓮聖人」と題して
一時間に亘り日蓮聖人の主張を續述され、聽衆大法悦の内に

午後四時五十分山口講師閉會を宣して會を卒る。日恰かも聖
祖大聖人御入滅の聖日に相當するので一同衷心から意義深い
今日の一日を感謝して御寶前に報恩謝徳の法味を捧げた。當
日の來會者二百有餘名。

●第十三日 (夜 間)

場所附下小松川、報恩閣で最大急行に御供養の赤飯を頂い
て自働車二臺に本多親下、磯部氏、石川隆一氏、山口智光氏
梶木氏、寛氏、一本木悦太郎氏、富田氏、高見澤氏外同乗し
て出發、親下は小松川に直行一隊は錦糸町より汽車にて小松
川立正會館に至る、早や小西日喜師は宣傳隊の陣頭にメカホ
ン宣傳眞最中我等の一隊は會館に止まり一隊は更に宣傳隊に
加はり全町を一周して適當の空地に陣を調へて街頭宣傳を始
めた、太鼓の音は静な小松川の夜の空に闇を破つて響いて行
く、開會梶木顯正師次に山田義一氏、今村藤一氏、中村清一氏
山口智光氏等又一方で梶木顯正氏、開會次で眞義章師立つて
現代生活の荒み行く原因を論ずれば聽衆忽ち五六十名周圍を
取り巻く、一方立正會館内では小西日喜師の開會之辭に七時
廿分教化講演會は開始され、一本木悦太郎氏次で和賀義見氏
本多日生親下の順序でプログラムは進められ終つて小西日喜
師の閉會之辭に會を閉ぢたのは九時四十分であつた、當夜の
來聴者四百名、應援者は岸野藤右衛門、氏竹内彌一郎氏、北

條平太郎氏、小澤元重氏、小澤源次郎氏、松岡林造氏、木下
耕一君、山口隆之助君、五島一雄君、近藤二郎氏、富田照世
氏、報恩閣婦人會々員多數外伊東竹三郎氏代理の方々に遠く
は瀧の川或は笹塚方面から來られた人々も多數あつて頗る盛
會であつた。

●第十四日

場所本所區錦糸公園、集合場を報恩閣の信徒ライトインキ
工場主篠崎氏が引受けて下さつたので司會者側としては大助
かり、今夜は風もなし天氣は好し全く日蓮主義日和か、例に
依り篠崎工場前に陣容を整へて會歌合唱支題の行進曲に太鼓
の音勇ましく堂々と練町の電車通りを目的地向ふ、公園正
門前には早や先發隊の川奈鏡作氏、岸野藤右衛門氏、中村藤
吉氏、高橋辰二氏、池澤泰明氏等集合されてゐた。七時廿分
開會山口智光師開會を宣して當夜のプログラムに入れば梶木
氏の紹介に依り田中道爾氏立つて大いに經濟困難を説いて國
民の反省を促し加藤重太郎氏次で「偉人に學べ」と熱叫し、一
本木悦太郎氏、池澤泰明氏、野島達平氏等交々愛國の熱を揚
げて最後に小西日喜師約四十分亘る熱そのものゝ如き大師
子吼に民衆の熱血を湧かせ同十時十分山口智光氏の閉會之辭
次で同氏の發聲に聖壽萬歳を三唱して終りを告げた。當夜の
來聴者三百有餘名、尙同所より一丁半斗り離れた所で小西上

人及山田義一氏別に開會されたので當夜は二ヶ所に開催した
譯である。應援隊は婦人側としては報恩閣の平井氏、下妻氏
高見澤氏等の夫人連其の他殆んど連夜五六名の方々が出席さ
れてチラシ撒き一切を引受けられた、男子側は森吉松氏、伊
東竹三郎氏代理神作社吉氏、小澤源太郎氏、難波芳雄氏、馬
田平藏氏、磯部滿事氏、中村清一氏、今村市三氏、寛銀二郎
氏、安住武都造氏、奥村長平氏、木下耕一君、山口隆之助君
五島氏、其他小松川立正會員に篠崎工場員の方々多數加は
つて下さつた。篠崎氏方では甘酒の御供養に更に一同ヘライ
トインキのお土産まで下され、各々家路に着いたのは正に十
一時であつた。

●第十五日

前夜に比して天候更に好く秋の静な空には月の光一際白く
輝いて居た、午後六時集合場篠崎インキ工場ではイザ來れ
ク！と斗り諸般の準備を整へ四方より馳せ參する應援者を持
てば程なく高見澤氏夫人及巖氏を始めとして詰かけて來る
(一同へ篠崎社長よりクズ湯の接待あり)、時間はよしと直ち
に出勤命令を下せば例の如く一同整列、會歌合唱、當夜のプ
ログラム朗讀終つて運動旗に支題旗太鼓と云ふ順序で出發、
目的地まで約五丁の行程を太鼓の音勇ましく民衆の注意を促
しつゝ徐々として行く、會場に到れば本多親下は已に御先着

直ちに高橋辰二氏の御遺文朗讀次で梶木顯正師開會之辭を述べて開會を宣すれば理事長本多親下登壇、先づ吾等の生活態度に就ての御示教あり讀いて大多和てい子氏立つて精神的復興を説き次に磯部滿事氏、松岡林造氏熱辯を振ひ次で岩野直英閣下は日蓮主義に對する態度に就て一般人の注意と反省を促され續いて本多親下再び演壇に立たれ大いに三教の精神と大和民族の特質を高調された。場面はさながら昔鎌倉街頭の日蓮聖人が獅子吼を觀るが如く、二時半に亘る同志の熱辯に四百に近き聽衆は身動き一つする者なく中にはあのジャリ原にアグラをかひて居る者下駄を臺にして腰を下して居る者幾十人、青年あり壯年あり娘あり老婆あり、勞働者あり紳士あり實に種々の階級を網羅して居た。最後に岩野少將の發聲にて萬歳三唱、本會のパンフレット「街頭宣傳の趣旨」及「佛教の信仰」六百部を施本して名残り惜しくも九時四十分同公園を縁町の篠崎家へと引揚げた。當夜の奉仕者は、和賀義見氏山口智光氏、磯部滿事氏、宇野博順氏、本田健二氏、中村藤吉氏、高橋辰二氏、難波芳雄氏、長山慶應氏、馬田平藏氏、後藤氏、安住武都造氏、神作桂吉氏其の他多數、婦人側としては報恩閣婦人會員高見澤氏夫人及藤氏、平井氏夫人、等を初め他數名であつた。婦人の身として連夜の御奉仕は特に感謝せねばならぬ。尙當夜は會場で鷺田平藏氏のお茶の接待があり、篠崎家では風邪を引かぬ様うとの御注意から「すいと

ん」の御供養があつた、兩夜に亘る篠崎家の種々な御配慮を忝ふした事店員の方々の御親切を深く感謝する。

●第十六日

陰曆九月十四日の皎々たる月夜大崎驛に近き居木橋交番橋に於て正七時より開演強風は支離旗其他の數流を中空に漂はせ宛然一幅の活畫を現した、磯部滿事氏先づ開會を宣し本運動の趣意眼目を説き續いて中村清一氏獨逸國民との對照を明し我國民の反省を促し、松岡林造氏共產過激思想の謬想を指摘し毛見熊太郎氏、山口智光師及立正大學小川英一氏續々所信を披歴し終つて理事長本多親下の約四十分を渉る大師子吼に百數十名の來聽者いづれも極めて緊張味を以て感銘深きを見受けた、やかて和賀義見師の閉會の辭と次回開講場所の豫告あり最後に磯部氏の主唱に、聖上陛下萬歳を和唱し無滞散會し多數の一枚刷と小冊子を希望者に施與し整然として五反田驛に太鼓の響も壯快に引揚ぐ、時に十時を過ぐること廿分。

當日の應援者は長山慶應氏、鈴木信愛氏、小野泰道氏、松永賢藏氏、吉田芳子氏、三浦波治氏、松永はな子氏、沼部彌太郎氏、坂本泰造氏、龜井省三氏、尾野宮一氏、大前慈光氏、河野通茂氏、永井省三氏、小野銳子氏等々であつた。

●第十七日 笹塚公會堂

所は廣く、夜店のはづれ行人多く會歌の高唱に忽ち人の山と築く。

六時半宣傳隊を二隊に分ち、小西師、箕師リダーとなつて笹塚町内を串題の太鼓の音壯快にメガホン宣傳、此の夜秋の夜に珍らしくも暖く、太鼓を打つ箕師の如きは遂に上衣を脱ぎワイシャツ委となつた程である、松岡氏、高見澤氏は不相變メガホンに太鼓かつぎに一同を鼓舞する、七時開會の辭を杉内芳太郎氏述べ次で小西日喜師「大使命に生く」熱烈に説き次で本多親下は「教化の大方針」と題して約一時間の大廣長舌終つて小林一師先生「王法と佛法」赤殆んど一時間の快辯に滿堂立錫の地なき來聽は歡喜した。磯部氏閉會を宣し、散會前に幹部の記念撮影をした。一方別動隊を組織して活動寫眞館前に路傍獅子吼を開始した、先づ箕師立つて開會を宣し、次に一本木悦太郎氏現下の思想混亂を懸じて其の歸一を唱へ笹塚立正會員杉内芳太郎氏熱烈なる信念を披歴し、次いで松岡林造氏國家多事の折柄すべから立正安國たらざる可からずと斷じ眞義章師「尙ほ能く忘るゝものあり、已れを忘る」とて信仰力を提唱、次に山口智光師登壇「日本國民覺めざる可からず」と懸河の熱辯を舊つて閉會、引あげたる時正に九時半なり。

●第十八日 淀橋專賣局前

集合所常圓寺よりは一丁足らず、專賣局正門前へ出陣銀座を遙かに凌駕すると稱せらるゝ繁華の巷新宿の延長、然も場

磯部滿事氏先づ起ちて、思想の戦に勝たんせば第一に國民精神の長所を發揮せざるべからずとて、本運動の精神を高調して開會を宣す、松岡林造氏は個人の幸福は國運の隆昌に依ると愛國心を叫び、次で働かぬ會長長峰田一歩氏は巨魁を臺上に運びユートピアたつぶりに然も強く、現代人の放逸遊蕩をこきおろす、代りて和賀義見師立ち、信仰を忘れたる民心のあはれさをとき日蓮主義の信念を喚起して國運の難局を打開せざるべからずと熱辯をふるう、小林啓善氏は國民の現状をときて教化の大衆化を唱え、山口智光氏は國民よ理想に覺めよと叫ぶ。小西日喜師起ちて人生を貫く力は信仰なり、佛祖の跡を生きよ、と聽衆に多大の感動を與え、中村清一氏の閉會の辭あり、磯部滿事氏の發聲に萬歳三唱、知法恩國の歌合唱、別動隊も相合して集合所に引上ぐ。

別動隊路傍傳道、天満宮前に開演。

先づ小西日喜師立ちて、「二點の最短距離は直線なり」と他の追従を許さざる師一流の烈火の熱辯に直線的なる大乘佛教の信の絶對境を説き談半ばにして師は專賣局前に於ける第一會場におもむく、次に安田信一師ジャズ狂燥曲に奏でられる現代社會相を罵倒し松岡林造氏紋付姿に登壇國難來の秋正しく知法恩國たれと叫び、次に眞義章師トルストイ、墨子を引

きて「相愛せざる可からず」として佛教の人生觀を説き熱烈なる口調に「日蓮も地獄に落ちべし」として聖者の人間愛を提唱して降壇、磯部滿事氏本運動の意義と運動を報じて閉會。毎夜出席働いて下さる松岡氏、高見澤氏始め、報恩閣の累徳婦人會の方々には誠に感謝に堪へない。

●第十九日 雨天休會

●第二十日

(曇天)場所は神田區今小路二ノ七地先、神田信道會後援のもとに六時卅分會場に勢揃ひ電車通りを駿河臺停留場へ向つて坂場愛民氏先頭に出發、途中表神保町角に於て救世軍の道路布教隊を追拂ひ裏神保町から救世軍本營前に出で、廻橋に向ひ會場へ、堂々四十餘名の隊伍を組んでメカホン宣傳宜敷七時十分梶木顯正氏開會次で玉島英龍氏、磯部滿事氏、北條平太郎氏、猪俣金太郎氏、和賀義見氏、木村日保上人とプログラムを進め時の移るを知らず正に九時卅分磯部滿事氏閉會の辭を述べ岩野海軍少將の發聲にて聖壽の方歳を三唱し會を終つた。

同別動隊

別動隊は梶木氏の開會之辭に神田劇場寄りの地先大通り十字路に開會直ちに松岡林造氏立つて大聲一番國難來を警告し續いて小川政徳氏、箕義章氏、鈴木秀學氏、綿引弘氏、吉田

通俊氏等交々愛國の熱辯を奮ひ最後に再び梶木顯正氏知法恩國會は聖徳太子及立正大師の御理想に基いて起つものにして三教の精神を取つて以つて我が國威を發揚し大和民族の特色を中外に宣明すべし、と結び閉會を宣するも聴衆去りもやらず梶木氏發聲にて 天皇陛下方歳を三唱して終る。今小路の本隊に戻れば正に九時半、さすがに秋も深く成つて來た爲に夜十時を過ぎるとかなり風が寒むくなつた。

當夜の應援者は島本龍太郎氏、坂場愛民氏、寺田規一氏、本田健二氏、山本政次郎氏、佐久間元三郎氏、中津平五郎氏、羽入田眞人氏、菊地雄三氏、近藤二郎氏、龜松壽准松氏、高見澤氏、伊東松三氏、石田氏、伊東竹三郎氏代理富田照世氏他に神田信道會員多數婦人側としては小原壽子氏、大音氏、老母、黒田あい子氏、小西師夫人等其他お世話下さつた方々多數此の寒空にお厭ひもなく連日連夜の御奉仕全く護法愛國の賜とは云ひながらお年寄りの身をも省す御手傳下さる貴い姿を見ては感謝せずには居られなかつた。

●第二十一日

場所深川不動公園、 集合所報恩閣の信徒野上長五郎氏方に當て同家を六時出發不動公園の周圍を示威行進一周し終つて七時十分同園廣場に開會、山口智光氏本會の趣旨を紹介すれば直に梶木顯正氏登壇「國難打開の途は國民思想の統

一を平り民心をして宗教的信念に立たしむるに在り」と絶叫し次に箕義章氏「日本が社會主義國家となりアメリカが社會主義國家となり西洋の諸國が共產主義の國家となつても白人の有色人種に與ふる壓迫は止まないであらう」と云ふラツセルの句を引いて東洋人の反省を促し特に日本人の立場を考へねばならぬ、と力説次で田中道南氏現在の經濟的國狀を説いて國民的緊張を力調し森川日修僧正「信仰を生活の根柢に置き」と熱叫され續いて箕義章氏、永井秀哉氏「らしく生きよ」と長廣舌を振ひ次に鈴木觀察氏「法華の妙理」を力説終つて和賀義見師本會の趣旨を簡單に述べて閉會を宣し磯部滿事氏立つて 天皇陛下方歳を發聲一同唱和して會を閉じたのは正に九時四十分、當夜の應援者は馬田平藏氏、龜井省三氏、宇野博順氏、土屋貞太郎氏、池田松一郎氏夫人及令嬢金指龜吉氏、難波芳雄氏、野澤一郎氏、富田顯道氏、婦人側としては報恩閣婦人會々員の方々それに地明會員安江久子、島本あさ子、岡野あき子、中田こと子、齊藤リイ子、櫻井りう氏、伊藤わか子、遠山イヨ氏、小西上人夫人其他多數、一同再び集合所野上氏方に支題の聲勇しく示威行進同家より暖かいおしる粉の御供養に各々舌鼓を打つて夜氣を拂ひ明日を約して家路に着いたのは十時半であつた。當夜二ヶ所の聴衆合して二百有餘名随分寒い日であつたが聴衆は熱心に身動もせず耳を傾けて居たのには感激させられた。

同別動隊

不動公園に開會と共に一方山口智光氏、磯部滿事氏、小西日喜師、和賀義見氏は別動隊としてタツミ劇場前に開會磯部滿事氏開會を宣すれば續いて小西日喜師立つて熱火の辯を奮ひ次に山口智光氏、和賀義見氏等交々起つて愛國の熱聲を擧げた。

●第二十二日

前夜に同じく野上氏方を六時十分四十餘名の同志各々大運動旗を先頭に高張メカホン隊大太鼓と云ふ順序で示威行進、所定の場所に望み七時開會之辭を磯部滿事氏承はり次で中村清一氏等々として現下の我國狀を訴へ代つて松岡林造氏「我が祖國の危機をナゼばんやり見てゐるのか」と反省を促し次に坂本泰三氏、箕義章氏、和賀義見師續いて山口智光師等立つて立正安國の本義と立正大師の主義信仰を高調力説し國民的一大發憤を要す、と白熱的叫びを掲げ終つて梶木顯正師本會の趣旨に御賛成の方は趣旨書を御持ち下さいと趣旨書及街頭宣傳の趣旨、佛教の信仰と題するパンフレットを頒布し最後に同師發聲にて聖壽方歳を三唱無事深川に於ける本會の講演會を閉じた。

同別動隊

場所同區タツミ劇場前、箕義章氏開會を宣し次で山口智光

師、梶木顯正師、磯部滿事氏等交々佛祖を背負つて熱血の獅子吼に聴衆の胸底を打ち最後に再び寛義章氏立つて閉會を宣す時九時を過ぐる冊分兩隊合して野上家に引擧げたのは十時であつた。當夜の應援者は馬田平藏氏、土屋貞太郎氏、渡邊清吉氏、福島健次郎氏、金指龜吉氏、龜井省三氏、高見澤廣氏、宇野博順氏、岩井藤吉氏、岸野藤右衛門氏、神作雅吉氏其他數名の方々、婦人側は報恩閣側の平井氏夫人を始め下妻氏夫人及令嬢高見澤氏夫人及巖氏其他數名地名會員齊藤リイ氏、櫻井りう子、鈴木なほ子、小野鏡子氏、宮下きく子他等々多數の御奉仕を得た、當夜も再び厚き御芳志に依つて風邪を引かぬ様うと暖かいおむすびの御供養を頂いて感謝と法悦に嬉々として歸路に着いたのは正に十時四十分であつた。

●第二十三日

晴、塲所川崎市川崎信用組合前、本部より午後四時半高見澤廣氏、松岡林造、富田顯道の三氏各太鼓旗提灯メカホン宣傳用ペンフレット等の包を背負ひ込んで上野驛から出發、同六時半一同毛見氏宅に勢揃ひ例の如く大太鼓の音力強く川崎市民が驚異の目を見張つてゐる中を堂々と行進、一周し終つて川崎信用組合前に七時開會、寛義章氏立つて開會を宣すれば續いて中村清一氏「道徳的善意思の教育に迄我が國の教育は進まねばならぬ」と斷じ今日の吾が國民は彼の獨逸國民にも劣

れり」と憂憤の色を見せ次に松岡林造氏人の心が腐れば國は亡びると叫び次で毛見熊太郎氏本會の街頭に起つ所以を述べ森川日修僧正、安田臺城師と交々熱血の叫びを掲げれば聴衆は冷い秋の夜風に吹かれながら去らず、一方別動隊は同市京濱電車停留場前に鈴木秀學氏の開會で廣瀨調氏、鈴木守吉氏中村清一氏、池澤泰明氏、磯部滿事氏、北條平太郎氏と代る／＼熱辯を奮ひ國民宜しく奮起すべしと絶叫して九時廿分梶木顯正師の閉會の辭に終りを告げ川崎信用組合前の本隊に歸れば廣瀨調氏等々たる講演に次で寛義章氏の閉會之辭終つて梶木顯正師の万歳發聲一同唱和して九時半全く會を閉じた。途中示威行進、毛見氏宅に引き揚げて各々歸路に着いたのは十時半であつた。當夜の應援者は岩上浦三郎氏、貝塚敏二郎氏、長谷川福太郎氏、和田皆吉氏、川又八百次郎氏、大原重雄氏、木村肇氏、手塚敬藏氏、西山喜太郎氏、大内正工氏、磯邊仁氏、毛見春吉氏、中村清一氏母堂及令妹石毛はる子氏、西村喜勢氏及令嬢、岸野藤右衛門氏、川奈鏡作氏其他多數。種々毛見氏の御盡力下さつた事を感謝する。

●第二十四日

午後六時塲所、府下大森町山谷立正教會に集合、川崎橫濱品川東京と合して應援者四十餘名宣傳隊の行進よろしく會場山谷稻荷神社境内に同七時開會、磯部滿事氏の開會に次で中

村清一氏、廣瀨調氏、立大生池上正二氏、會員手塚敬藏氏、洋大生高吉純明氏續いて寛義章師、望月辨修師、岩野海軍少將閣下等代る／＼熱辯を奮つて愛國の熱情を高め九時廿分岩野閣下發聲に聖壽万歳を三唱會を閉じた。尙別動隊として寛義章、遠藤實正氏、梶木顯正師、小野泰道氏、岩野直英閣下、磯部滿事氏等第二隊を編成、夜見世通りに於て大いに愛國の至誠を披瀝し民衆をして多大の感涙を興へた。立正教會に引き擧げたのは十時過ぎ、大原氏の精神を込めた御供養に舌鼓を打つて一同散會。當夜も珍らしく風は無し非常に暖かき聴衆も多數であつた。特に大原氏の種々御世話下さつた事を深謝せねばならぬ。本日の應援者は大原重雄氏、毛見熊太郎氏、同春吉氏、木村肇氏、西山喜太郎氏、岩上浦三郎氏、長谷川福太郎氏、和田皆吉氏、貝塚敏二郎氏、石毛はる子氏、磯部仁氏、大内正工氏、雞波芳雄氏、高見澤廣氏、大前慈光氏、池澤泰明氏、松岡林造氏等並に大森立正婦人會員の方々多數御後援下さつた事を深く感謝する。

●第二十五日 塲所府下品川町雨の爲に休會

●第二十六日

塲所、江戸川橋詰、集合塲を早稲田南町正法寺に當て、豫定地に開催のつもりだつたが相憎前日からの雨がヤマナイのみか益々猛烈お晝頃のラヂオは夜は十五メートル位の風が出

るとの事、然し會としては雨の場合は集合塲の正法寺で開催すると廣告してある譯だから是が非でもやらねばならない午後二時盛んに降つてゐる中を梶木顯正氏は布教用具を取りに大森山谷の立正教會へと出かけた。富田顯道、松岡林造の兩氏は宣傳用のペンフレットを携帶して正法寺に出發する、正法寺では本堂内で開催すべく準備に着手、午後四時梶木氏は自働車で荷物を搬入した、山岸照吉氏正法寺若手連に同青年部の方々松岡、富田、梶木の三氏が加はつて降りしきる雨をものともせず大太鼓を擔いで附近町内宣傳に出かける雨は益々痛快と云ふ程猛烈に降る、山岸氏の如きは雨が背中まで通つたと云ふ程で、六時一先づ引き揚げて一同正法寺で夕飯を御馳走になり再び來合せた高見澤廣氏を加へて松岡林造氏に同寺青年部員の方々が提灯片手に太鼓を荷つて宣傳に出かけた。時計は段々開會の時刻に迫る七時梶木顯正氏開會を宣するに聴衆十二三名、續いて伊藤寛道氏、大泉事龍氏次で松岡林造氏、猪俣金太郎氏と辯論は熱度を高めて行く、雨は時刻を經るに従つて益々猛烈に、次に高吉純明氏終つて笠原教授「雨を聴衆として」と冒頭して信仰安心を第一義觀とすと説き次に立正大學生柿沼貫雲君立ち最後に木村日保上人立たれた時は聴衆三十餘名、同師は主師親三徳圓滿の久遠本佛を光顯して日蓮聖人の大日本の主張に及び説き去り説き來つて時正に九時廿分深き感銘を興へて降壇され梶木顯正氏閉會の辭を

述べて無事散會、雨は盛んに降つて居る。當夜の應援者は宗學林生八名、早川太吉氏、大關庄太郎氏、大多和てい子氏、正法寺青年部員數名であつた、司會者側としては寛義章氏が少し遅れて來られた。

●第二十七日

場所 江戸川橋詰、昨日の雨も今日は忘れた様にケロリと止んで小春日の様にボカ／＼と暖かい、今日こそは昨夜の仇打をやる日なりと本部では統一團の日曜講演が終るのを待つて午後五時山口智光、中村清一、磯部滿事、松岡林造、富田顯道、梶木顯正の六氏は自働車をかつて出發、同六時半集合場正法寺に勢揃ひ一同新調の知法思國のマンドーを先頭に旗太鼓メカホン隊よろしく喜久井町の方から音羽通りへと夜店通りを堂々約六十名が隊を成して行進、秋の星空に太鼓の音は韻々と響いて三四丁の外に鳴り互る、七時目的地に着するや和賀義見師開會を宣し續いて鈴木秀學氏叫びを挙げ一本木悦太郎氏、遠藤實照君次で山口智光氏、秋山乾英氏、小西日喜氏等熱血の叫びに再び和賀義見氏立ち次に寛義章氏、猪又金太郎氏等交々熱を擧げて最後に梶木顯正氏瀧の川に於ける明晩の宣傳をやつて會を閉ち會員寺澤萬三氏の發聲にて聖壽萬歳を三唱散會したのは九時半であつた。來聽百數十名、當夜の應援者は正法寺の檀信徒諸氏並に神田信道會員等多數それに東京

寺院側からは森川泰修氏、子安華丈氏、安田豪城氏、來須行道氏、吉野法惠氏、島本龍太郎氏、波邊光雄氏、川奈銚作氏、近藤二郎氏、櫻井源次郎氏、田中久氏、山岸照吉氏、今村市三氏、大關庄太郎氏、綿引弘氏、安藤林平氏、早川太吉氏、大多和てい子氏、宇野博順氏、鈴木教友氏、釋眞誓師、大谷權次郎氏、宮下きく子、平井夫人、遠山いよ子、高見澤藤氏、瀧の川本佛教會幹事數名に宗學林學生數名であつた。隊伍堂々正法寺に引き揚げ英菓の御馳走になつて歸路に着いたのは十時半。當夜は別動隊を山口磯部の雨氏が引率して矢來下に開會した概況左の如し。

別動隊

江戸川橋詰の本陣より第二隊を組織したる別動隊は磯部滿事氏、山口智光氏に引率されて途中題目行進住友銀行平込支店前に陣取り、開會の辭を磯部滿事氏うけたまはり次で中村清一氏、猪俣金太郎氏、和賀義見氏、寛義章氏、京藤義應師代る／＼立つて白熱化したる日蓮主義の愛國の叫びを高調した折柄反對側にキリスト教の宣傳隊が叫んでゐたが太鼓に驚いて去つた、吾等は力説又力説時の過ぐるのを忘れて熱叫した九時半漸やく山口智光氏の閉會の辭に本陣へ引き揚げた。靜かに更けて行く都大路の空には吾等同志の力強く打つ聖戰の陣太鼓が雄々しく韻々と響いて行く。

●第二十八日

場所 瀧の川町役場樓上にて、集合場の瀧の川本佛教會には早くも午後五時横濱から市川からそれ／＼同志の面々が集まつて來る、六時頃「出發」と云ふとボツ／＼雨が落ちて來た、爲に豫定の街頭宣傳は中止一路會場町役場指して行進、大凡六十名程娘子軍あり老婆軍あり青年軍あり老爺軍あり音吐朗々玄題の聲勇しく進む、雨は益々強くなる、會場前に丸形を畫いて會歌合唱一同會場に入れば忽ち場の大半を埋む盛況同七時和賀義見氏開會を宣すれば聽衆雨を肩して詰掛ける次で「現代の款陷」と題して鈴木秀學氏登壇續いて池澤泰明氏「宗教の情操」山口智光氏「國の誇りを誇れ」と叫び田口公信氏「太平洋文明の確立」を高調次に本多日生親下「正しき信念と其根據」と題して約一時間人と國と教の三方面から論及せられ明解なる斷案を下して聽衆ヤンヤと拍手する中に降壇、次で佐藤草藏閣下「所謂新思想と日本國民の本領」と題して一時間論議され最後に小西日喜氏「閉會の辭」を述ぶるに當つて師の全人格を打込んだる焼射彈の如き燒かざれば止まずてう熱火の辯に會を閉じ、梶木顯正氏の慰勞懇親會等に關する今後披露あつて岩野海軍少將發聲聖壽萬歳裡に無事散會した時正に十時廿分過ぎ。當夜は三吉顯隆上人も見えた、應援者は山田芳太郎氏、武子喜太郎氏、小日向和三郎氏、松岡林造氏、富

●第二十九日 雨天休會

●第三十日

場所 淺草區三味線羽市場前、今日は思ひがけなく暖かで天候も申分なし、午後五時半からボツ／＼同志は集合所の本部に集まつて來る豫定の六時諸般の準備を整へて本部を出發一路清島町から三味線堀へと白赤紫の運動旗を秋風に翻ひしつゝ題目の聲に太鼓の音勇しく行進、市場前に至るや齊藤英子、遠山いよ子、櫻井りう子氏等の御蔭で開會の準備が出来て直ちに梶木顯正氏開會を宣し次で田中道爾氏、岡野源吉氏、中村清一氏、鈴木秀學氏、山田義一氏、鈴木觀察氏、土橋觀英氏、磯部滿事氏、山口智光氏、小西日喜氏等プログラムに依つて熱血の叫びを揚げ吾れ人ともに時の移るを知らず梶木顯正氏最後に閉會の辭を述べ磯部滿事氏の發聲にて聖壽の方歳を三唱散會したのは同十時であつた。當夜の聽衆約四百名、街頭三

時間に互る長講席を移動せず聞きたれど聴衆には些少か驚かされた、餘程感銘する處があつたと確かに思はれた。尙當日の應援者は三上正夫氏、水澤靜子氏、高見澤巖氏親子三氏、石川隆一氏、上村益夫氏、齊藤リイ氏、花水菊太郎氏、武子喜太郎氏、木村聰八氏、櫻井りう子氏、遠山いよ子氏、宮下きく子氏、福島健次郎氏、子安華丈氏、安江ひさ子氏、伊藤わか子氏、岡野あきの氏、島本あさ子氏、岸野藤右衛門氏、本田健二氏、川奈鏡作氏、富田顯道氏等々に報恩閣婦人會の方々並に本佛教會幹部及小松川立正會々員の人々多數御來援、婦人側にしても男子側にしても連日の御後援は全く何んと云つて感謝してよいか有難いと云ふより他に言葉がない。尙安江清海氏から當夜茶菓を寄附された。講演場で何かと御心配下さつた齊藤リイ子、櫻井りう子、遠山いよ子氏には茲に深く感謝する。

別動隊
本隊を市營市場前に置いて第二隊を同衛生試驗場前に開會磯部滿事氏開會の辭を述べ次で一本木悦太郎氏、柴田隨學氏、小西日喜氏等起ち終りに梶木顯正氏閉會を告げて散會聽衆約百名。

●第三十一日

晴、場所淺草區新谷町壽仙院、本部を午後六時廿分例の如く隊伍堂々と四十名の行進隊出發、七時壽仙院に着く會歌唱

會員多數、安江ひさ子、伊東わか子、岡野あきの子、島本あさ子氏等地明會員多數に報恩閣の耕一君、陸之助君等であつた。當夜森川泰修氏が種々御配慮下さつた事を深く感謝する。

●十一月一日

曇天後小雨、日暮里島谷正三郎氏宅を集合場として三河島改正道路警察偵に第一隊開催、梶木顯正氏開會之辭次に阪上昭氏、中村清一氏、和賀義見氏、岡野源吉氏、田中道爾氏、子安華丈氏、寛義章氏、梶木顯正氏、山口智光氏代る／＼立つて現代生活の矛盾を痛撃し「明るい日本建設の爲に起てよ國民興れ民衆」と慨世の雄叫びを掲げ。同日暮里第百銀行前に陣取つた第二隊は山口智光氏の開會之辭に次で山田義一氏、磯部滿事氏、小西日喜氏、山口智光氏、和賀義見氏等同くそぼ降る雨をものともせず交々立つて論難肉迫益々出て益々痛烈、聽衆又熱して雨にぬるるを知らず、報恩閣の婦人會員諸子は雨の中をパンフレットを配布する、手掲提灯をカザシテ警戒の任に當る男子會員、雨を冒して壇上に講師の口をツイて出づる烈々たる熱火の辯こころした場面にみなぎる強い暖い感激を盈む気分、その眞剣と嚴肅さは全く聖そのものの姿であつた。最後磯部氏萬歳を發聲して九時半會を閉ち島谷家で暖かい御供養を頂いて歸路についたのは十時半。當夜の應援者は土屋貞太郎氏、本佛教會の小田氏、高見澤親子、岸野藤右衛門氏、報

題に次で梶木顯正氏開會を告げ磯部滿事氏、高倉宜雄氏、山田義一氏、永井秀哉氏終つて本多日生親下登壇靜かに日蓮聖人の遺文を拜讀「眞の救ひは釋迦牟尼佛より」と冒頭されて約廿分説示され最後小西日喜氏の閉會の辭に萬歳三唱で終りを告げ直ちに第二隊へと向はれた、時に九時。

第二隊は淺草公園裏門入口に開催(七時廿分過ぎ)山口智光氏の開會の辭に續いて岡野源吉氏立ち田中道爾氏叫び次で小西日喜氏獨特の熱辯に聽衆の血を湧かせ更に鈴木秀學氏山口智光氏次に岸野直英閣下登壇「菩薩たれ」と絶叫され最後に本多日生親下偉大なる體軀をやをら壇上に現はるる斗り音吐朗々聖人が再び民衆の前に出でられたかと思はるる斗り音吐朗々「いかでか法華經の行者の誇りの叶はざるべき……」と遺文奉讀あつて「本佛の力」と題し本佛釋尊の現に吾等を救護さるゝ大慈大恩を熱誠に披歴せられ、次で梶木顯正氏閉會之辭岩野海軍少將發聲萬歳三唱して散會した。終つたのは十時。二ヶ所の聽衆合して二百餘名、當夜の應援者は子安華丈氏、鈴木觀察氏、尾野宮一氏、中村清一氏、土屋貞太郎氏、廣瀬調氏、伊東氏店員の方々木村聰八氏、野島連平氏、森川泰修氏、秋山乾英氏、長谷川義一氏、吉野法惠氏、山口正教氏、大谷橋次郎氏、富田顯道氏、安江清海氏、高見澤巖氏親子、上村益夫氏、島本龍太郎氏、加藤重太郎氏、水澤靜子氏、齊藤リイ子、遠山いよ子、櫻井りう子、下妻有隣氏夫人及令嬢、平井氏夫人等報恩閣婦人

恩閣若手連に島谷氏店員の方々それに地明會の宮下きく子氏他一名小西夫人等々多數、尙島谷氏が本講演會開催の件に就て種々御配慮を煩はした事當夜は又格別の御款待を添うした事を深く感謝すると共に高見澤巖氏が富田君と共に宣傳用具を往復とも荷車でお運び下さつた事を茲に併て謝する。

●十一月二日

場所品川町本光寺前、本光寺を集合場として本部から梶木顯正、山口智光、富田顯道の諸氏に報恩閣の耕一君陸之助君午後五時先着直ちに準備を了り此處を本陣として妙國寺門前に第二部隊を置き同七時開會本陣の方は梶木顯正氏開會之辭續いて酒井日儀師代理高倉宜雄氏次で菅川常應氏、鈴木秀學氏、阪本泰造氏、本多親下、京藤義應氏最後に寛義章氏閉會之辭を述べ磯部滿事氏の發聲にて聖壽萬歳を三唱散會す。

妙國寺門前に開會した第二部隊に磯部滿事氏の開會に次で京藤義應氏山口智光氏の講演を以て打切り更に南馬場通り天龍寺門前に開催、梶木顯正氏次に阪本泰造氏、磯部滿事氏、和賀義見氏を以つて終る。當夜の聽衆合して四百餘名會を閉ちて本光寺及び特志家より茶菓の接待を受け其より妙國寺に御禮の爲本多日生親下を訪問歸路に着いたのは十一時であつた。本日の應援者は大前慈光氏横濱の中村榮二氏及母堂石毛はる氏、岩上清三郎氏、川奈鏡作氏、石川隆一氏、岸野藤右衛門

氏、石崎榮安氏、木村聰八氏、高見澤巖氏、本田健二氏地明會員
島本あさ子氏、安井ひさ子氏、伊藤わか子氏報恩閣婦人會員諸
子數名に品川方面の信徒諸氏等々であつた。秋の夜風に吹か
れながら星を戴き月を眺めて連夜市内外に此處まで叫んで來
て見ると今の時代何んと云つても大衆の前に突撃し得る宗教
は我が日蓮主義を描いて他にない事を確信すると共に深い感
謝と感激に打たれて無限の有難さに唯だ底知れぬ一種の力量
さを感じずには居られぬ。

結 文

●十一月三日、豫定の十月街頭布教は昨日を以て一先づ
打切り、最初明治神宮参道口に於て火蓋を擧げたのであつた
が今茲に明治節を卜し知法思國會本部に大講演會を開催する
は淺からざる因縁のあることと思ふ。そして當日の集りは少
くも二つの意味が含まれる其の一は第二期街頭教化運動に對す
る結末をつける事と他の一は此運動に参加した同志の慰安と
道念結束を強強盛にせんが爲めである。

定期に先じて有志は陸續として參會し豫期以上に統一閣階
下の大講堂は詰詰めの有様となつた。午後一時半梶木顯正師
開會の宣言に次で本門法華宗務總監三吉顯隆師は「吾等の
使命」と題して立正門下俗俗の覺悟を説かれ。次に文學士小
西日喜師は「聖彈の一生」題下に現今の國情を痛憤し聖戰の爲

めに我等は巨彈の如き熱と力を以て此一生を捧げざるべから
ずと、氏獨特の熱辯を振ひ。續いて大阪の京藤義應師は「心の
莊嚴」と題して聞信戒定進捨悔の七寶を嚴るべく以て不惜身
命に護信建立を力説し。次に慶大教授柴田一能師は「吾人の
祈り」と題して寺院佛教より會館佛教へと自分多年の活動
標語であつたが時益急なれば更に一步進出し街頭教化の運動
こそは當に時代適應の最たるもので吾人は邁進あるのみとて
本會の自警文を朗讀された。續いて海軍造船少將岩野直英閣
下は「日本人」の題下に當日宮中の明治節御招宴の際外國使節
の 聖上陛下御稜威に感激せる状態を目撃し感深く彼等の
與へられた物質文明に報ゆるに我精神文化、就中佛教思想を
以てせんと論斷し降壇。小蓮の後、理事長本多日生親下は「本
佛の力」の題で文明構成の根本は人心にある、そこで之を善導
するに二面あつて其の一は教化を興ふこと、其二は救護により
人々の歡喜生活を保全するそれには吾等の魂の問題を明かに
し魂に就ての信念を十分に教へられた又其魂と相結ぶとこ
ろの宇宙には大人格があるか否と此魂の本體と宇宙の本質
を明示され進んで其大人格者の實在を光顯され佛教の教理よ
り一步深く立入つて救護力に説き及ぼされ終つて本佛釋尊の
唯我一人能爲救護乃至如來秘密神通の力の全文によつて縱橫
自在に本佛釋尊の無量無邊の御力をお明しになり如何なる者
でも教はれ成佛せざるなきを徹底せしめられ隨喜法悅の界圍

記 事

對岸の野口上人

(第九信)

謹白

秋冬之候各位様彌御清穆奉大賀上候、小生少敷病
氣靜養中無音に打過申譯も無之候、シャトル着後の
狀況一寸申上候。

歐洲大戰々死者英靈 在外同胞先亡者大追弔會、在
米同胞は勿論白人の市長始め參拜者多數有之、終て
茶話會を開き一時間半に渡り宗教及學會思想界に付
き談話を交換せり。

日本會館大講演會 小柄は、統一神教(マンダラ本
尊)及び佛教文化の題下に約二時間半講演(最も講
演前席上に本尊を祭り修法佛日増輝皇道光被世界平
和人類福祉之法要を嚴修せり)如何なる講演にも本
尊をかけ修法を第一とせり。

ワシントン大學講演「統一神教と日本文化」、書畫道
講演及席上揮毫會、講演會後講堂にて方一丈四方に

(元了)

氣分は講堂に充溢した。時に薄暮此の機會に有志一同は庭
内に於て記念撮影する間に一方では餘興の用意が準備され立
正日曜學校の無邪氣な讚佛歌童謡や舞踏數番又眞義章師作の
「母様供養劇」は其底深く流れて居る宗教情緒に大きな感銘を
備さしむるものがあつた。夫等は眞師の幹族と中島澄子女の
伴奏や高見澤巖氏の照明燈が多く力の力を添へたことを感謝す
る。七時過ともなつたので打切り、階上に用意の食卓に移り
懇親會食中に一口所感を各自述ぶることとなり先づ小西日喜
師の墓開に次で和賀義見氏京藤義應師加瀬俊武少將峰田一
歩勤く會長から野島連平氏田中道爾氏猪又金太郎氏大多和
い子女阪場愛民氏石川隆一氏中村清一氏等夫々白熱的英鋒い
よ々々猛烈を極めたが本多理事長は時をはかられて徐ろに立
たれ「今回の街頭宣傳に關してこれに従事せられ或は聲援せ
られた諸君の勞を感謝し併せて自分の感じた事柄を一二申上
げたいと思ひます」と冒頭され此計畫を起す所以から其聽衆
の熱心さや講演者の批評と信徒會員諸氏の至誠外護等に及び
其大成功を感謝祝福された。其後山口智光師梶木顯正師眞義
章師磯部滿事氏釋眞誓師等の所感披露あつたが九時も過ぎた
事として更に大回を期し 陛下の萬歳を和唱し大盛會も目出度
幕を閉ぢた。

(平和幸福)の四文字及絹地四五枚揮毫(大文字の分は同大學東洋部へ貫度との事故寄附他は教授達の希望に任せ授與せり、此日スタル博士及四、五名來聽種々談話を交換せり。今迄の經驗に依ると日本人より白人の方求道心強き様感ぜられ候、其他龍口法難、小松原法難、明治節等に講演、亦ヤキマ、タゴマ、マカテヲ(何れも二、三十哩、百哩の處なり)等に出張講演せり、ヤキマは耶蘇對治的講演なり、猶太寺院參觀視察、最高修法日(一日中斷食との事)流石に結合猶太人外は入寺を不許、傳手を以て參觀を許されたり。スタル博士來訪小生よりも往訪、宗教上東洋思想西洋思想に付き談話意見を交換せり。博士は東洋通の聞え高く來年日本及朝鮮へ參るとの事なり、博士より小生をシカゴ大學へ紹介下され候。

二陣三陣必要に候、白人耶蘇教にあき佛教を求むる機運熟せり、キャンソツク擡頭せり。

英領バンクーバ行 講演當地會館に統一神教文化基準に就て一人演説、眞宗開教師及他大に周旋下され候、公園記念塔前平和祭及戰死英靈祭修行白人塔の如し、大戰參加日本人五拾餘名戰死記念碑前同向

會嚴修せり、日本人墓地へ參拜何れも大花輪を捧げ燒香散花。

小柄は歐語不得手 口論說法不可能故意輪說法身輪說法之積りにて其の場合は大禮法服を着用せり、是が因縁を結び白人も寫眞を撮るもの多し、先は右迄書外又々可申上候。

在米同胞及白人に向て日本の佛教日蓮主義及日本の文化を説き下種結縁出來候事も皆々様の援助に依る事と深く感謝致居候、小柄も身體健全に復し候故不日經育方面へ向ふ積りに候。

日本も政變思想混亂教化慇懃員と承候、委細のごワシントン日本大使館宛御送被下候はト世間及出世間の悦に候、不日平和日本全權も當米に來り英國行との事に候、忙しき事に候、日本國民老若男女總動員の時と存候、不然他國に先手を越され候、先は右迄各位之健康祈候。

南無妙法蓮華經。

十一月十三日 シャトルにて
日 主 拜

後援各位殿

教 報

○東京統一團本部教報

▼十二月一日(第一日曜)午後一時半開會、法要に次で講演會に移る、本多現下には「本佛釋尊と日蓮聖人」と題して大聖人の本地を開顯し、本佛釋尊の本世開顯に呼應して本化上行の大自覺は全く三世造物の上に選ばれたる道徳選告なる事を方説され、内秘外現の古菩薩はカマツテ久遠古佛の御活躍を高調するものなることを約二時間に亘つて惇々と御教示になった。猶開會に寫んで屋外教化運動參加者一同へ理事長本多大現正より感謝狀を下された。

地明會例會の方は統一團階上で本多現下大學師のよみに山口智光櫻木顯正の二師列聖修法終つて講話會に移り、會長本多日生現下の「修養と思想」と題するお話があつた。當日は新福井町報恩閣の果經人會地明會合同開會で非常に盛會であつた。向當日午前十時より約四十五分間修養講座に現下のラヂオ放送があつた。

▼同十五日(第三日曜)午後二時開會、晴、最初に法要、次で講演、「佛教の信仰情懷」と題して本多大現正の二時間に亘る御示教あり同四時半散會した。聽衆百有餘名。暫らく無かつた講演會開會日の盛況が近頃又々ボクノ、五つて來た、佛陀の御教お聴聞する處にも益みをする迄に窮窮して來た心の淺ましが一入哀れに思はれる、昔釋尊が恒伽池邊で說法せんとなさつた時に、其の聖衆の中に一人の惡人が居る事を佛弟子の日連尊者が御覺に成つて直ちにそれをツマミ出された、これが中阿含經波經の中に出てゐるが彼れは正法時代、これは本法の時、況んやの一字々々色々さる、御互ひに注意を怠らぬやう、自他への反省と與同罪を働ぶ。

▼同二十二日(第四日曜)統一團日曜講演會午後一時から世界平和大講演會として佐藤卓藏中將、小西日喜師、篤義京氏中村清一氏和賀義見師。以上

十一月名古屋布教報告

五日夜	開日抄講義	會館にて	原田日勇師
八日夜	婦人會法話	會館にて	清水一乘師
十五日夜	開日抄講義	會館にて	原田日勇師
十三日晝	宮樂寺御會式法話	同	原田日勇師
十二日晝	追分布教所御會式法話	同	原田日勇師
十二日晝	巖山寺御會式法話	同	原田日勇師
廿四日	南井紡績講話	本多現下	原田日勇師
廿二日	豊田本社 平和の生活	本多現下	原田日勇師
廿三日	大曾根新川工場講話	本多現下	原田日勇師
廿四日	教化大講演會法華經中心主義	同	原田日勇師
廿三日	四日市安樂寺法話晝夜二回	同	原田日勇師
廿四日	日本車輛會社講演	本多現下	原田日勇師

大 阪 教 報

▼同八日(第二日曜)午後一時半開會、晴、當日は統一團主催の日曜講演は街頭に開會することにして場所を上野公園弘法殿上に定む、尙同時刻から統一團より岸野藤右衛門氏川奈銚作氏松岡林造氏高見澤氏豊田富田顯道氏外同師會員中村清一氏高天徳教師等々カモン大太鼓を懸け御教説を聴し旗鼓堂々出發、「開會之辭」中村清一氏に次で廣瀬調氏横いて和賀義見師松岡林造氏高見澤氏高天徳教師小西日喜師終つて最後に田中道爾氏「開會之辭」を述べて散會したのは夕方の四時半であつた。禮券通じて三百餘名、冬枯れの時期さしたては近頃珍らしく暖い日であつた。

大阪の京藤本教師は十、十一の二ヶ月に亘る司法保護事業講習會に三時間間の學科と五十

餘ヶ所の見學を三十日無事修了したり津京中
布敷に參加せしは十月二十二日市川立正會館
にて現代思潮と日蓮主義二十七日江戸川終點
十一月二日品川に於ける知法恩會の教化運
動に參加三日統一閣にて心の莊嚴四日品川本
榮寺にて信仰の力十二日前込顯本寺にて國民
覺醒の秋二十日大森妙道會にて現在の世相と
日蓮主義二十三日牛込當樂寺にて國民覺醒の
秋二十七日品川本光寺にて現代思想と日蓮主
義 以上

市川通報

十一月三日午後五時半、立正少年少女 秋の
大會、立正會館
意識、童話、劇、遊戯、化裝、活動等。
十一月七日午後七時、家庭講話會、小澤元重
氏宅
修法、講話、鈴木秀學師、田口公信師。
十一月十日午前十時、立正少年少女會、立正
會館、聖語解 田口、童話 梅澤、平林。
十一月十二日午後七時、教化講話會、立正會
館
時事漫談 山田義一氏、現代の結構 鈴木
秀學師、國の誇りを誇れ 山口智光師、時
を凝視めて 田口公信師。
十一月十七日午前十時、立正少年少女會、立
正會館、教育童話 梅澤、山田先生。
十一月二十二日午後七時、教化講話會、立正
會館

開會の辭 山田義一氏、菩薩道 小林一輝
先生、報告は第一線より 小西日喜師。
十一月二十四日午前十時、立正少年少女會、
立正會館
童話 梅澤、鈴木先生。
十二月一日午前十時、立正少年少女會、會館
聖語解 田口、童話 梅澤、鈴木、夕田先
生。
十二月七日午後七時、家庭講話會、竹澤久信
氏宅
修法 講話 鈴木上人。
十二月八日午前十時、立正少年少女會、會館
聖語解 田口、梅澤、鈴木先生。
十二月十二日午後七時、教化講話會、會館
法燈の世界 鈴木秀學師、光を掲ぐる者
山口智光師、師教の響 田口公信師。

十一月千葉教信

七日 味庄光明寺、本佛と妙法五字
木村日香師
十二日 上野妙興寺、開會辭
山本賢乘師
信仰に對する信解を徹せよ
木村日香師
十三日 村田泉福寺、
出口眞道師
信仰の光
出口眞道師
同寺且家にて、統一的大本尊
木村日香師
十五日 船木安樂寺、

金澤教報

十一月一日 佛教講話會、六斗林本是等にて
婦人の力 本郷常次郎氏
十一月二日 立正開演會、立正開創立一周年
紀念大講演會を開く
實教を求めに 杉田常政師
佛教徒の態度に就て 能仁一十師
十一月三日 佛教講話會、卯辰町本光寺に於
て
三大秘法と願業生活 本郷常次郎氏
實在觀念の確立 能仁一十師
十一月六日七日 鐵道講話、兩日北陸線津幡
驛にて
獻ぐるの生活 能仁一十師
十一月八日 家庭講話、野田町つば其樓にて
孝養の第一義 能仁一十師
十一月十一日 家庭講話、岩根町畑中氏宅

信仰の二大特色 本郷常次郎氏
十一月十五日 當樂會、六斗林本覺寺にて
法華經と二大文化 本郷常次郎氏
富本會榮師
十一月十六日 獅子王青年會、立正閣にて
道徳と宗教 能仁一十師
十一月十七日 日曜學校傳會式、立正閣にて
日本一の日蓮上人 能仁一十師
十一月二十日 佛教講話會、桃島町立正寺に
て 富元會榮師
十一月二十日 精神講話、石川郡森本村にて
聖戰の陳頭に立ちて 能仁一十師
十一月二十三日 家庭講話、野町橋本宅にて
朝に祈り夕に感謝 能仁一十師
十一月二十四日 御會式、給坂本長寺にて
如來壽量品の宗教 能仁一十師
十一月二十六日 天晴會、本長寺にて

日蓮上人の教義
極樂を尋ねて
十一月二十九日 家庭講話、本多町河合宅
獻ぐるの生活 能仁一十師
十一月二十八日 佛教講話會、本多町本行寺
にて 正統佛教 寺島常誓師

編輯局より

金解禁の年を迎へます、一方何よりも根本問
題たるべき文部省の教化運動はどうなつたの
でありませう、益同人の責任を痛感致すで
はありませんか、「若黨共二階三階續けよか
し」と總裁本多祝下は不斷の御精進をお示教
下さいませ。本年はよりよき御奉公致したい

ものではありませんか、「吾は今年何を成さん
と本佛釋尊に誓へるや」を決定してかゝりた
い。
本多祝下の「法華經の正信念」は益々の健進
すべき妙境を拜して二度より三度と反覆せず
にはおかれませぬ、次第にて完結の豫定であ
ります、御精進お願致します。
街頭布教記事と巻頭口繪を御對照下さい。
松村氏の諸教批判に對して數通の御意見が届
いておりますが紙数の都合で作殘念次回に廻
した事を御察察下さい。
統一誌は不思議な冊誌で読者毎に心に力強い
深い感銘を與へらる點を御實験願ひたいもの
であります。

恭賀新年

大僧正 本多日生

謹賀新年

恭賀新禧

統一 關 梶 木 顯 正

高 木 鎔 三 郎

山 口 智 光

立 正 會 館 小 西 日 喜

府 下 瀧 野 川 町 六 一 五

本 佛 教 會 和 賀 義 見

千 葉 縣 市 川 町 大 門 通 り

大 日 本 立 正 會 館

大 森 山 谷

立 正 教 會 大 森 妙 道 會

川 崎 市 榎 町 十 五

大 日 本 妙 道 會 毛 見 熊 太 郎

川 崎 市 大 島 二 五 五 一

妙 道 會 大 島 支 部 廣 瀨 調

府 下 六 鄉 八 幡 塚

六 鄉 支 部 矢 向 豊 太 郎

橫 濱 市 磯 子 町 一 四 八

法 悅 協 會 磯 部 滿 事

地 明 會 川 原 謹 子

本 多 都 喜 子

自 慶 會 理 事 安 川 繁 種

賀 正

府 下 品 川 町 妙 國 寺

統 一 編 輯 局

教 編 輯 局

同 人 一 同

東 京 市 千 代 區 市 谷 甲 良 町 十 二

川 奈 錠 作

正 賀

謹而新春の賀詞を交換し、恭敬合掌、以て佛日増輝、皇道繁榮
萬民快樂 菩薩行精進、如風於空中一切無障礙

南無妙法蓮華經

同師會一同

(申込順)

千 葉 縣 山 武 郡 土 氣 本 郷 町 土 氣

善 勝 寺 溝 口 會 旭

千 葉 縣 山 武 郡 山 邊 村 餅 木

法 輪 寺 日 蓮 主 義 藝 術 布 教 會

手 代 木 常 整

大 阪 市 天 王 寺 區 生 玉 前 町

堂 園 寺 京 藤 義 應

四 日 市 沖 島 町

安 樂 寺 田 久 保 本 誓

靜 岡 縣 田 方 郡 南 村 大 土 肥

妙 高 寺 田 中 通 正

千 葉 縣 山 武 郡 山 邊 村 金 谷

法 光 寺 渡 邊 善 儀

千 葉 縣 山 武 郡 豐 梅 村

小 高 常 之 助

北 海 道 札 禮 市 白 石 町

賴 成 山 顯 本 寺

京 都 市 上 京 區 北 野 白 梅 町 衣 笠 園

板 本 正

千 葉 縣 山 武 郡 大 網 町 宮 谷

本 國 寺 土 屋 賢 生

兵 庫 縣 印 南 郡 西 神 吉 村

妙 信 寺 村 岡 本 量

千 葉 縣 山 武 郡 源 村 上 布 田 三 百

藥 王 寺 齊 藤 日 章

東 京 府 南 綾 瀨 町 小 谷 野 六 三

川 原 禎 一

小 谷 野 三 七 七

鈴 木 信

小 谷 野 一 七 九

清 水 塗 料 製 造 所

小 谷 野 七 六

釣 具 專 門 西 村 製 作 所

茨 城 縣 鹿 島 郡 若 松 村 太 田

長 照 寺 田 久 保 日 城

千 葉 縣 山 武 郡 丘 山 村

清 瀧 寺 増 田 智 靜

靜 岡 縣 濱 名 郡 白 須 賀 町

妙 泰 寺 高 橋 道 碩

本多狷下の三大名著

法華經要義

四六判 六百數十頁
 總振假名付
 定價 金 參 圓
 法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賜天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判 三百五十餘頁
 總振假名付
 定價 金 壹圓 八十錢
 法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判 七百餘頁
 總振假名付
 定價 金 參圓 五十錢
 十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇説せるもの、誰人にも易々として理解の金鑰を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

價定一統		料告廣一統	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢	四分一頁	金九錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	一頁	金五圓
	送料共		送料共
	事之金前		事之金前

昭和四年十二月廿四日印刷納本
 昭和五年一月一日發行
 (第四百十八號)

編輯兼發行人 磯部滿事
 印刷人 鈴木日雄
 印刷所 東京府花原郡品川町南品川百八十一番地
 電話 高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
 編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
 振替東京五一〇七一番

第四十九號

目次

所感	本多日生
法華經の正憶念(完結)	本多日生
諸教の批判に就て	
天風三萬里紀行(其七)	小林日種
常林寺日寬上人事蹟一端	松尾清明
記事	
○在米野口上人より	○各地教報
○偶言一束	○知法思國會懇談會
	○知法思國會會計報告
	○誌料領收

第三十五年二月號

統一

